

古代漢語における否定詞について

鈴木 直 治

まえがき

- 1 常用の否定詞
- 2 「不」と「無」
- 3 「不」と「否」
- 4 「非」と「不」・「否」
- 5 「無」と「亡」・「毋」
- 6 「不」・「無」と「弗」・「勿」
- 7 「未」と「無」・「不」
- 8 「莫」と「無」
- 9 その他の否定詞——「靡」・「微」・「蔑」・「未」

ま え が き

この小論は、主として、春秋戦国の頃における否定詞について、それぞれの特性を明らかにしようとしたものである。

春秋以後、漢語の虚詞は、全体として、大きく発達し、語法的に整理されたものになって来ている。それらの虚詞の特性をよくとらえようとすれば、一般的には、やはり、まず、西周以前の文献について、その来源を明らかにし、その発展として、それぞれの特性を究明してゆくべきものと考えられる。わたくしが、これまで、《金沢大学教養部論集・人文科学篇》の中に、「《書経》語法札記」として、《書経》における虚詞を中心にして、数篇の論文を発表して来たのは、それによって、それらの虚詞における本来の特性を明らかにしようとするものであった。

しかし、否定詞については、《書経》などにおいても、その主要なものは、春秋以後におけるものと、ほぼ、同じである(注1)。また、それらの否定詞は、その否定のしかたが、似

(注1) 甲骨文においても、その主要なものは、ほぼ、同じである。管燮初氏の《殷虚甲骨刻辞的語法研究》(1953年、中国科学院)と陳夢家氏の《殷虚卜辞綜述》(1956年、科学出版社)には、甲骨文における否定詞として、「勿」・「弗」・「不」・「弜」・「亡」・「毋」の6種をあげているのであるが、韓耀隆氏の《甲骨卜辞中否定詞用法探究》《中国文字》(第45冊～第47冊)(1972年～1973年)には、上記のほか、に、「非」を追加している。

なお、この小論において、甲骨文における否定詞について述べたことは、主として、上記の三氏の論著、および、李孝定氏編の《甲骨文字集釈》(1965年)によった。

かよっていることが多く、それで、互に通用されるものと説かれていることが、少なくない。しかし、この通用という説明のしかたは、その多くは、その機能のただいだけをとらえた便宜的なものであって、単にその説明ですましたのでは、個々の否定詞の特性をよくとらえることはできないし、また、従って、その否定詞の用いられている原文の意味をよく精細にとらえることはできない。

それで、この小論においては、古代漢語における否定詞の特性を研究するのに、まず、主として、春秋戦国の頃における用法に着目することにした。単にその資料が多いというだけではなく、その原文についての異説が、比較的少なく、また、その原文の微意を推知しうる用例も多いと考えられるからである。西周以前における否定詞の特性も、その主要なものは、この春秋以後のものに見られる特性と、基本的には、大差のないものと見るべきものであろうと考えられる。もちろん、春秋以後には、西周以前に較べ、その否定詞の中にも、若干の消長のあることは、やはり、当然のことというべきであらう。

用例をあげる場合、《書経》については、「《書経》語法札記」と同じく、その篇名の次に、《真古文尚書集釈》（加藤常賢、1964年、明治書院）の頁数と、《尚書今古文注疏》（孫星衍、1935年、商務印書館、国学基本叢書本）の巻数と頁数とを並列して注記し、《詩経》は、その篇名の次に、全篇としての番号を注記し、《論語》・《孟子》は、哈仏燕京学社の「引得」になって、その篇章の番号を注記した。

また、《左伝》・《墨子》・《孫子》・《荀子》・《莊子》・《列子》・《礼記》は、「漢文大系本」により、《国語》・《戦国策》・《管子》は、「国学基本叢書本」により、また、《史記》は、滝川亀太郎氏の《史記会注考証》によって、それぞれ、その巻数と頁数とを注記した。

1 常用の否定詞

古代漢語の文献に用いられている否定詞の種類は、かなり多い。しかし、それらの否定詞は、その声母は、いずれも、両唇音の系統のものであって、破裂音pの類のものと、鼻音mの類のものと、この二つの類のものである。また、春秋以後、一般に常用されていたものは、だいたい、7種ほどであったといえることができる。例えば、《論語》の中に用いられている否定詞について、その声母の類に分けて、その使用数と使用率とをあげれば、次のようになっている。参考のため、《孟子》の中における使用数と使用率をもあげておくことにする（注2）。

（注2）古代語についての推定音は、藤堂明保氏の《漢字語源辞典》（1965年、学燈社）によった。
《論語》・《孟子》における使用率は、森本角蔵氏の《四書索引》によって、その全字数を、そ

〔声母 p の類〕

不 puīæg 「之」部

《論語》 580 字, 3.64% 《孟子》 1071 字, 3.03%

否 puīæg 「之」部

《論語》 1 字, 0.01% 《孟子》 26 字, 0.07%

非 piuær 「微」部

《論語》 28 字, 0.18% 《孟子》 129 字, 0.36%

弗 piuæt 「隊術」部

《論語》 5 字, 0.03% 《孟子》 37 字, 0.10%

〔声母 m の類〕

無 muīæg 「魚」部

《論語》 131 字, 0.82% 《孟子》 265 字, 0.75%

未 miuæd 「隊術」部

《論語》 57 字, 0.36% 《孟子》 90 字, 0.25%

莫 mak 「魚」部

《論語》 16 字, 0.10% 《孟子》 57 字, 0.16%

勿 miuæt 「隊術」部

《論語》 13 字, 0.08% 《孟子》 24 字, 0.07%

亡 miang 「陽」部

《論語》 9 字, 0.06% 《孟子》 3 字, 0.01%

毋 (母) muæg 「之」部

《論語》 7 字, 0.04% 《孟子》 0

末 muat 「祭月」部

《論語》 5 字, 0.03% 《孟子》 0

微 miuær 「微」部

《論語》 1 字, 0.01% 《孟子》 0

上にあげた《論語》と《孟子》とにおける否定詞の中, その使用率のもっとも高いもの

れぞれ, 15,917 字, および, 35,374 字として計算し, また, 小数点下第二位までにとどめ, 第三位以下は, 四捨五入した。

また, その使用数も, 《四書索引》を基礎とし, かつ, 否定詞としての用法のものに限った。それで, 例えば, 「非」については, 「誹」の意味の動詞としてのもの, 「是」と対して用いられる意味のものなどを除き, 「莫」については, 「文莫」(《論語》7・33)の「莫」をも除いた。また, 「亡」についても, 「滅亡」・「死亡」・「亡失」などの意味に用いられているものを除いた。「微」・「末」などについても, 「衰微」・「微細」の意味のものや, 「本」に対する意味のものを除いた。なお, 「勿」の《孟子》中の使用数については, 《四書索引》の中に誤脱している「勿奪其時」(1 a 7)の「勿」を加算した。

は、声母p類の「不」と、声母m類の「無」であり、それについて、「非」と「未」、更にそれについて、「弗」と「莫」・「勿」であって、この7者が、《論語》と《孟子》とを通じて、その常用のものであったといえることができる。また、この7者は、《論語》と《孟子》だけではなく、その他の諸子の書においても、また、《左伝》などにおいても、ほぼ、同じように常用されているのであって、春秋以後、一般に常用されていたものといえることができる。

上にあげた常用の7種の否定詞については、古くから、お互にあい通じて用いられることが多いものと説かれている。例えば、「不」については、劉淇の《助字辨略》には、「弗也」・「莫也」と説いており、また、王引之の《経伝釈詞》には、更に、「非也」・「無也」・「勿也」と解しうるものと述べている。楊樹達氏の《詞詮》も、この《経伝釈詞》の解説にならっているのであるが、裴学海氏の《古書虚字集釈》には、更に、「不、猶未也」と説くべき用法のあることをあげている。また、「無」についても、《経伝釈詞》には、「勿也」・「不也」・「非也」・「未也」と説き、《詞詮》にも、「莫也」・「不也」・「非也」・「未也」と説いている。

否定詞は、このように、あい通じて用いられることが多いものと説かれている。しかし、全く同一の機能のものは、古代語においても、次第に、単一化されるようになっていたものと考えられる。それで、この常用されていた7種の否定詞には、その否定のしかたに、それぞれ、ある特性があったものにちがいない。もちろん、經典などの中の語句が、ほかの古典の中に引用されている場合、その否定詞が、違ったものになっていることも、少なくない。《経伝釈詞》の中には、そのような例が、多くあげられている。しかし、そのように、引用されているものなどにおいて、その否定詞が入れ替っているもののあることを重視して、それぞれの否定詞の特性を軽視してはならない。

古代語の否定詞は、上述のように、その声母は、いずれも、両唇音の系統のものである。また、その韻部においても、あい通じているものが、少なくない。それで、古典伝承の際に、ほかの否定詞に入れ替って伝えられ、それがそのまま引用されていることも、少なくないものと考えられる。また、否定詞には、その機能の上において、否定という共通性があるのであるから、ある句の中の否定詞が、ほかの否定詞におき換えられても、その句意が、なお通ずるものであることも、少なくない。しかし、単にその句意が、だいたい通ずるということによって、それで、その原文の意味が、全体として、よくとらえられているものとはいえることができない。春秋以後、上記の7種のものが、否定詞として常用されていたということは、その否定ということにおいては、共通であっても、その否定のしかたは、やはり、それぞれ、違っていたものと考えなければならない。

2 「不」と「無」

まず、「無」は、「無」の隸書における略体であって、秦以後の字体である。その「無」は、《説文》には、「豊也」と説かれているものなのであるから、否定詞として用いるのは、その字音を仮借したものである。

この「無」は、「有」に対するものとして、事物などの存在しないことを表わすのに用いられる。これが、「無」の本質的な用法であるということができる。例えば、

(1) 無臣而為有臣，吾誰欺，欺天乎。(論語9・12)

上例のような「無」も、否定詞といわれているのではあるが、このような「無」は、存在しないことを表わす一種の動詞であって、存在を表わす動詞を否定する語法的な機能のものではない。しかし、「無」は、また、次のように、「有」を否定するのにも用いられる。これは、否定の機能をもつ語法的なものとしての用法ということができる。あるものの存在しないことをいうのに、単に「無」というよりも、「無有」という方が、もちろん、より強く重い言いかたであったにちがいない。

(2) 然而無有乎爾，則亦無有乎爾。(孟子7 b 38)

〔「乎爾」は、語氣詞を連用したもので、焦循の〈正義〉には、「決絶之中，尚有余望也」と説いている。〕

「不」は、その字形は、花のふくらんでいるがく^くの象形であって(注3)、否定詞として用いるのは、やはり、その音を仮借したものである。この「不」は、通常、動作・性状などの否定に用いられるものであって、「無」のように、事物などの存在しないことを表わすことはない。このことが、「無」と「不」とにおける基本的な相違であるということができる。

例えば、上例(1)の「無臣」は、もちろん、「臣」の存在しないことを述べているのであるが、次の例(3)の「不臣」は、「臣らしくない」ということであって、その「臣」は、「臣としてもっておるべき徳性」を表わしているものである。また、次の例(4)における「臣」は、「(ある人を)臣にする」という動作を表わしているものである。古代語においては、事物を表わす名詞は、このように用いられることが多かったのであるから、「不」が名詞の前に用いられていることも、少なくはない。しかし、その「不」の働きは、やはり、その事物に関係した性状や動作の否定であったということができる。

(3) 信如君不君，臣不臣，父不父，子不子，雖有粟，吾得而食諸。(論語12・11)

(4) 舜之不臣堯，則吾既得聞命矣。(孟子5 a 4)

「不」が、上例のように、事物などを表わす語についても用いられるのに対して、「無」もまた、動作・性状などを表わす語についての否定にも用いられる。これは、もともととは、やはり、その動作や性状の存在しないことを表わすものであったと考えられる。古

(注3) (注2) にあげた藤堂明保氏の《漢字語源辞典》を参照。

代語における動詞や形容詞は、現代語におけると同様に、その動作や性状を抽象化して、一種の抽象名詞のようにも用いることができたのであるから、そのように用いられていることも、少なくない。上例(2)の「無有」なども、もともと、この用法のものであったということができる。それで、この種の用法の「無」は、同じく動作や性状の否定ということではあっても、その否定のしかたが、「不」とは違っていたものといわなければならない。例えば、

(5) 君子食無求飽，居無求安……（論語1・14）

〔《経伝釈詞》に、「無，不也」と説き、この例文をその1例としてあげており、《詞詮》も、それによっている。

なお、この例文は、《儀礼》〈公食大夫礼〉の〈鄭注〉の中に、「君子食不_レ求飽」として引用されており、その〈賈疏〉の中引用にも、「学者食不_レ求飽」とある。〕

(6) 不有君子，其能国乎。国無_レ殫矣。（左伝・文公12年9—7）

〔《経伝釈詞》や《詞詮》は、この例における「無」も、「不」と見るべきものとしている。

なお、この例の前文は、仮定関係の複文である。「不有」は、例(2)の「無有」とは異なって、このように、仮定の従句に用いられることが多い（注4）。〕

上例(5)・(6)における「無」は、「不」におき換えることができないわけではない。注記しておいたように、《経伝釈詞》や《詞詮》などにおいては、「不」と解しており、現在、楊伯峻氏の《文言虚詞》(1965年、中華書局)なども、その説によっている。しかし、「不」と「無」とは、古代漢語における声母 p 類および声母 m 類の否定詞の中において、その使用率がもっとも高く、それぞれの類の代表的な否定詞である。この兩者について、その機能を同じもののように見ることは、きわめて問題である。やはり、その否定のしかたに、大きく異なっているところがあったものといわなければならない。

「不」と「無」の否定のしかたの相違は、後者は、もともと、存在の否定であるのに対して、前者は、動作・性状そのものの直接的な否定であるということによるものということができる。すなわち、「不」は、動作の否定に用いられる場合、その動作することそのことの否定、つまり、その動作を発動することについての否定であって、その動作を発動する意思の否認を含んでいることが多いものであり、また、性状の否定に用いられている場合においても、その性状についての直接的な否定であって、その性状についての話し手の判定の心意が加えられていることが多いものである。「無」は、それに対して、動作・性状を表わす語について用いられても、その動作・性状を、それぞれ、一つの事柄として、その存在を否定するものであって、その動作意思までも否認するものではなく、また、その性状についての話し手の否定的な判定の心意が加えられているものでもない。

（注4）「不有」は、また、次のように、反語の文に用いられる。

不有博奕者乎。（論語17・22）

なお、「有」が「保有」の意味の場合には、やはり、「不有」が用いられる。

匹夫而有天下者，德必若舜禹，而又有天子薦之者。故仲尼不有天下。（孟子5 a 6）

「不」と「無」との否定のしかたは、このように、大きく違っているものということが出来る。それで、上例(5)・(6)の場合においては、その「無」を「不」におき換えても、その文意の大体は、なお通ずるのではあるが、おき換えると、その文意が全く違ったものになることも多く、また、おき換えることができないものも多い。例えば、

(7) 之三子告。不可。(論語14・21)

「(三子が)許可しようとしなかった」という記載者の判定が加えられているのである。もしも、「無可」とすれば、単に「(三子が)許可しなかった」という事実を述べることになる。」

(8) 我則異於是。無可無不可。(論語18・8)

「この例の「無可」を「不可」に換えれば、全く文意をなさないものになる。」

(9) 志士仁人、無求生以害仁、有殺身以成仁。(論語15・9)

「この例における「有」は、その存在を表わすということから、その次のような動作がなされるということを強調しているものである。《馬氏文通》(校注本vol.4 p.228)に、この例を引用して、特に「惟有殺身以成仁而已」と解説しているのは、この強調の語気を示そうとしているのである(注5)。

この例における「無」は、この「有」とあい応じて、その次の動作がなされることがないということ、を、確定していることとして述べているものである。もしも、この「無」を「不」におき換えれば、その意思の否定を表わすようになるのであって、その下句の「有」とあい応じないものとなる。それで、その場合には、その下句の「有」をも取りのぞかなければならぬ。」

以上述べたところからして、「不」と「無」との用法を対比していえば、「不」による否定は、その動作の発動、または、その性状についての否認であって、その否定について、話し手の強い心意が加えられていることが多いものであるのに対して、「無」による否定は、事実としての存在の否定であるということが出来る。つまり、「不」による否定は、主観性の強いものであるのに対して、「無」による否定は、客観性を主としているものであるということができる。このことが、古代語における「不」と「無」の用法の基本的な特徴であるということが出来る(注6)。前に例(6)について注記しておいたように、「不有」が、「無有」とは違って、仮定の従句や反語の文に用いられるということも、「不有」は、単に存在しないという事実を述べるものではなく、話し手の心意が強く働いているものであることによるものと考えられる。次の例などにおける「不」と「無」との用法も、やはり、両者のこのような相違を、よく示しているものということが出来る。

(注5) 拙論「有」による強調の表現について》《金沢大学教養部論集・人文科学篇2(1964)》を参照。

(注6) 古代語における「不」は、現代語においても、だいたい、そのまま、「不」と訳すことができる。しかし、この種の「無」については、現代語においては、そのまま、「没有」とおき換えることができ難いものが、少なくない。例えば、前例(5)の「君子食無求飽」の「無」は、《論語》の現代語訳においては、楊伯峻氏の《論語訳注》(1958年、古籍出版社)・錢穆氏の《論語新解》(1964年、新亜研究所)などを始め、ほとんど、「不」と訳されている。楊樹達氏の《詞詮》などに、前述のように、その「無」を「不」と解しているのも、あるいは、このような現代語からの類推によるものかとも考えられる。しかし、古代語における「無」の機能は、現代語における「没(有)」によって、そのすべてが継承されているものではない、ということ、をよく考えておかねばならない。

(10) 二三子以我為隱乎。吾無隱乎爾。(論語7・24)

(11) 暴虎馮河，死而無悔者，吾不與也。(論語7・11)

なお、「不」と「無」との用法について、きわめて注意しておかなければならないことがある。それは、まず、「不」は、禁止の命令に用いられていることが、きわめて少ないということである。次にあげた例(12)・(13)のような例も、ないわけではない。しかし、このような例は、先秦の文献においては、ほとんど、例外的なものともいうことができる。「不」が、そのように、禁止に用いられることが、きわめて少ないのは、「不」は、上述のように、動作の直接的な否定であって、通常、その主語の位置にあるものが、その動作を発動しないこと、その動作を発動する意思のないことを述べるものであることによるものと考えられる(注7)。

(12) 墨者夷之，因徐辟而求見孟子。孟子曰，吾固願見。今吾尚病。病愈，我且往見。

夷子不來。他日又求見孟子。(孟子3 a 5)

〔趙注〕は、この文につき、孟子の言ったことは、「……我且往見」までとし、その次の二句について、「是日夷子聞孟子病，故不來。他日復往求見。」と説いている。それに対して、朱子は、「……夷子不來」までを孟子の言ったこととしていたように考えられる。また、《経伝釈詞》には、この文の「不」を「勿也」と解しており、現在においても、この説によって、禁止を表わしているものとしている人が多い。しかし、「不」が、このように、「勿」とも説きうるような例は、きわめて少ないものであって、《経伝釈詞》にも、この例のほかには、《書経》〈召詰〉(p.117, 18-73)と《左伝》(昭公32年26-49)とから、それぞれ、1例あげているだけである。また、《詞詮》や《古書虚字集釈》なども、この《経伝釈詞》の説によっているのであるが、その例証としてあげているのは、ただこの孟子の1例だけである。それで、呂叔湘氏は、この《孟子》の例について、〈趙注〉を正解とすべきものであらうと述べており(注8)、また、わが国の佐藤一斎も、その《孟子欄外書》において、「夷子不來，是記者之語。或以為孟子之言誤。」と説いていた。〕

(13) 何寿之有，敬不率君之觴。(漢書 vol. 66・車千秋伝)

〔釈大典の《文語解》には、「不」が「禁止ノ辞」に用いられている例として、ただこの1例をあげている。〕

「不」は、上述のように、禁止に用いられることが、きわめて少ない。それに対して、《書経》などにおいても、禁止には、通例、「無」が用いられており、春秋以後の文献においても、やはり、通常、「無」が用いられている。例えば、

(14) 無友不如己者。(論語1・8)

(15) 王如知此，則無望民之多於隣国也。(孟子1 a 3)

(16) 王無異於百姓之以王為愛也。(孟子1 a 7)

「無」は、もともと、具体的な事物の存在しないことを表わす動詞であつたと考えられ

(注7) このことは、現代語においても、ほぼ、同様である。《中日大辞典》(愛知大学日中大辞典編集部編)には、「不」が制止・禁止に用いられるのは、「別」・「不要」の代りに用いられるものと説いている。

(注8) 呂叔湘：〈論母与勿〉《漢語語法論文集》(1955年，科学出版社) p.34 を参照。

るものであって、その「無」が、動作についての否定に用いられるのは、前述のように、もともと、その次の動作を表わす語が、一種の抽象名詞化しているものについて、その存在を否定するものであった、ということができる。その「無」が、上例のように、禁止を表わすのに用いられるのも、もともとは、その次の動作がないということを抽象化して一つの事柄とし、命令する者の望んでいる事項内容として提示するものであったろうかと考えられる(注9)。上例(15)・(16)に見られるように、その文末に、提示する語気を表わす「也」が用いられていることが多いのも、そのためであろうと考えられる。すなわち、もともとは、「無」そのものに、禁止を表わす語法的な機能があったのではなく、その文脈によって、禁止の意味がとらえられていたものと考えられるのであるが、このような用法が多く行われている間に、次第に、「無」における一種の語法的な機能ともなって来ていたものであろうと考えられる。

3 「不」と「否」

「無」は、上述のように、もともと、存在しないことを表わす動詞と考えられるものであって、単独で述語となりえたものである(注10)。それに対して、「不」は、単独で述語となることは少なく、通常、動作または性状を表わす語句の前に、否定的に限定する副詞のように用いられている。しかし、「不」も、もともとは、単独でも述語として用いることができたものなのであって、春秋以後においても、なお、次のような用例をも見ることができる。

(1) 均之絶不、説在所均。(墨子・經下10—13)

(2) 臣觀吳王之色、類有大憂。小則嬖妾嫡子死、不則國有大難。大則越入吳。(國語・吳語19—222)

〔〈章注〉に、「類、似也」とある。〕

上例のような用法の「不」は、春秋以後には、通常、「否」と表記されるようになっていく(注11)。

(注9) 楊伯峻氏は、「無」は、禁止のほかに、「欲」などの後に用いて、願望を表わすこともできる、と説いているのであるが、それも、同様に、その次の動作がないということを抽象化して、一つの事柄としているものということができる。《論語》の中においても、次のような例が見られる。

予欲無言。(17・17)

願無伐善、無施勞。(5・26)

なお、楊伯峻氏は、この種の「無」をも、「不」と同じ機能のものとも述べているのであるが、やはり、そのように見る必要はない。

楊伯峻：《文言語法》(1957年、北京出版社)8・21、および、《文言文法》(1963年、中華書局)7・13を参照。

(注10) 「無」は、例えば、次のようにも用いられる。

本之則無。(論語19・12)

(注11) 「否」の字は、《甲骨文編》・《統甲骨文編》にも、収録されていない。《書経》の中においても、〈虞夏書〉に2字、〈商周書〉に4字用いられているだけである。

(3) 宣三年矣。未知母之存否。(左伝・宣公2年10—13)

(4) 二三子用我今日，否亦今日。(左伝・成公18年13—69)

上例(1)における「不」は、この場合、その前の「絶」という動作の発動を否定した「不絶」という意味を表しているものである。古代語においては、このように、その否定する動作が自明である場合には、「不」をこのような一種の自立語として用いることができたのであるが、この種の用法の「不」は、春秋以後、通常、例(3)のように、「否」と書かれるようになっていく。この例(1)の「不」に対して、例(2)における「不」は、単にある動作の発動を否定する意味を表すものではなく、「嬖妾嫡子死」という一つの事柄の存在または発生を否定する意味を表しているものである。この種の用法の「不」も、春秋以後、例(4)のように、通常、「否」と書かれるようになっていく。また、この例(2)のような例からして、「不」は、もともと、単に動作や性状の否定だけではなく、一つの事柄の発生または存在などをも否認することができたものと考えられる。

「否」の字形は、「不」に「口」を添えたものである。このような字形の作りかたは、「唯」が「口」を添えることによって、「唯諾」の応答語であることを表わしているのと同じように(注12)、もともと、否定の語気を表わす応答語として作られたものであったと考えられる。事実、「否」は、次のように、否定の応答語として、多く用いられている。

(5) 伯夷伊尹於孔子，若是班乎。曰，否。自有生民以来，未有孔子也。(孟子2a2)

〔趙注〕に、「班，齊等之貌也」と説き、「否」について、「孟子曰，不等也」と説いている。

(6) 孟子曰，許子必種粟而後食乎。曰，然。許子必織布而後衣乎。曰，否。許子衣褐。

(孟子3a4)

〔趙注〕に、上例の問答の中、後の方の陳相の答につき、「相曰，不自織布。許子衣褐。」と説いている。

(7) 天与之者，諄諄然命之乎。曰，否。天不言。以行与事示之而已。(孟子5a5)

(8) 萬章問曰，或謂孔子於衛主癰疽，於齊主侍人瘠環。有諸乎。孟子曰，否。不然也。

(孟子5a8)

〔趙注〕に、「否，不也。不如是也。」とある。「不如是也」は、「不然也」を解説したものである。

(9) (景子曰，……) 丑見王之敬子也。未見所以敬王也。曰，惡。是何言也。齊人無以

仁義与王言者。……故齊人莫如我敬王也。景子曰，否。非此之謂也。(孟子2b2)

上例(5)(6)における「否」は、その〔趙注〕にいうように、それぞれ、その性状・動作を否定しているものであることにはちがいない。しかし、「否」は、例(6)に見られるように、「然」に対する応答語として用いられているものである。「然」は、その相手のいうことを是認する場合に用いられるものである。それで、例(6)における「否」も、単にその動作を否定するものというよりも、その相手が尋ねて言っていることを否認する

(注12)《説文》に、「唯」について、「諾也。从口隹声。」とある。

語気を表わしているものということができる。例(7)における「否」は、もちろん、その相手の尋ねる事柄の存在を否認したものであり、例(8)も、同様のものということができる。更に、例(9)における「否」は、その相手の発言を全面的に否認し、その発言は、自分のいおうとしたことではないことを述べるものである。原文の「非此之謂也」(そのことをいうではありません)は、その誤認を解こうとしているものである。

「否」は、以上のように、その相手の述べることを否認しようとする場合の応答語として用いられていたものということができる。この「否」は、上例(8)について、注記しておいた〈趙注〉に見られるように、「否、不也」と解せられていることが多いものである。

《説文》にも、「不也」と解せられており、また、「从口不、不亦声」と説かれているのであって、もともと、「不」と全く同音のものである。それで、もともとは、「不」も、このような応答語として用いられていたものにちがいない。また、このように、その相手のいうことを否認しようとするすることが、もともと、「不」における重要な本質的な用法であったものであろうと考えられる。「不」が、春秋以後、通常、動作・性状の否定に用いられているのも、本質的には、このような話し手の否認する心意を表わすものであったと考えられる。

4 「非」と「不」・「否」

「非」は、《説文》に、「違也」と解かれている。「非」が、次の例(1)・(2)のように、「是」に対するものとして用いられ、また、「似」に対するものとして用いられるのも、いずれも、この「違」の意味に関連しているものにちがいない。「非」が、否定詞として用いられるのは、この「似」に対して、「ちがう」という意味の動詞として用いられることによっているものということができる。

(1) 前日之不受是、則今日之受非也。(孟子2 b 3)

(2) 惡似而非者。(孟子7 b 37)

「非」(piuə)は、否定詞としては、その声母P類のものである。それで、「不」・「否」(ともに puŋə)と、きわめて近いところがあったものであろうと考えられる。

「非」は、上述のように、「ちがう」ということを表わすことから、一種の応答語のようにも用いられている。例えば、

(3) 文侯曰、谿工子之師邪。子方曰、非也。(莊子・田子方7-1)

(4) 問曰、夫子之任見季子、之齊不見儲子、為其為相与。曰、非也。(孟子6 b 5)

上例(3)の「非」は、その「ちがう」ということからして、同一性の否定を表わしているものであり、例(4)は、そのことの理由について、その相手の推測したことを否定しているものである。前述の「否」は、もちろん、このような場合の否定にも用いられる。

次の例(5)は、同一性の否定、例(6)は、実際上、その相手の推測した理由について否定しているものともいうことができる。

(5) (萬章)曰、然則舜偽喜者与。曰、否。(孟子5 a 2)

(6) (楽正子)曰、何哉、君所謂踰者。前以士、後以大夫、前以三鼎、而後以五鼎与。

曰、否。謂棺槨衣衾之美也。(孟子1 b 16)

〔趙注〕に、「公曰、不謂鼎數也。以其棺槨衣衾之美惡也。」と述べている。

なお、《孟子音義》によれば、この「否」は、テキストによっては、「不」となっていた。〕

上述のように、「非」と「否」とは、あい通じているところがある。しかし、その類としては、同じであっても、その否定のしかたは、やはり、異なっていたものといわなければならない。

まず、「非」は、この種の応答に用いられる場合、単に「非」とだけいうことはなく、上例(3)・(4)に見られるように、通例、「非也」と「也」を添えていう。「否」には、そのように、その後に、更に、「也」などの語気を表わす助詞を添えている例は、見られない。それで、まず、この種の応答に用いられている「非」は、やはり、一種の動詞であって、「否」と同じように、「然」に対するような応答語になっていたものとはいうことができない。

また、その「非也」と用いられる「也」は、春秋以後、提示・解明などの語気を表わすものとして発達して来たものである(注13)。それで、その「非也」は、その相手の述べることは、ちがっているものであることを、よく説明するように述べるものであって、そのように、解明しようとする語気を表わす「也」を伴うものであることが、「非」の大きな特徴であると考えられる。それに対して、「否」は、その後に、更に、話し手の語気を表わす助詞などを添えずに、話し手の否認しようとする心意を、直接に端的に表明しているのである。すなわち、「否」は、端的に話し手の心意を表明することを主とするものであるのに対して、「非」は、そのことについて、事実や事理を説明することを主としているものであるということができる。

「非」は、また、多く否定の繫詞のように用いられる。これは、もちろん、その「ちがう」という意味から、同一性、相関性などを否定するのに用いられているものである。例えば、

(7) 管仲非仁者与。(論語14・17)

〔肯定の場合の用例。〕

夫子聖者与。(論語9・6)〕

(8) 此非吾君也。(孟子7 a 36)

〔肯定の場合の用例。〕

彼丈夫也。(孟子3 a 1)〕

上例について注記しておいたように、古代語においては、肯定的に同一性を表わそうとする場合には、その事物などを表わす語が、そのまま、述語としての働きをなすのであって、現代語における「是」のような肯定の繫詞が必要であったわけではない。それで、上例におけるような「非」は、否定の繫詞とすべきものではなく、王力氏のいうように、「不」

(注13) 拙論〈「也」の来源について〉《中国語学204号(1970年10月)》を参照。

と同じく、否定副詞ということができるものである（注14）。

「不」も、もともと、この種の同一性を否定する副詞としても用いることができたものであったろうと考えられる。ただ、恐らくは、「非」よりも、話し手の否認しようとする心意が、強く働いていたものであろうかと考えられる。春秋以後においても、なお、次のような用例が見られる。しかし、このような用例は、全体として、きわめて少なく、「不」は、やはり、前述のように、通常、動作・性状の否定に用いられるようになっているものということができる。

（9）在今而安百姓，女何_レ折言人，何敬_レ不_レ刑，何度_レ不及。（墨子・尚賢下2—29）

〔原文の「言」は、《経伝釈詞》にいうように、「否」の誤りであり、その「否」は、その次の「不」と同じものである。〕

この文は、《書経》の〈呂刑〉から引用したものであるが、現行の《書経》の〈呂刑〉においては、次のようになっている。

在今爾安百姓，何_レ折_レ非人，何敬_レ非刑，何度_レ非及。（p. 181, 27—54）

（〈偽孔伝〉では、「在今爾安百姓兆民之道，当何所_レ折，非惟吉人乎，……」と解している。）〕

（10）苟_レ不至_レ德，至道不_レ凝焉。（礼記・中庸 31—16）

〔〈孔疏〉に「不，非也」と注し，更に，次のように述べている。〕

苟誠_レ非至德之人，則聖人至極之道，不可成也。俗本不作非也。〕

次に、「非」は、また、動作を表わす語句についての否定にも用いられる。しかし、その否定のしかたは、「不」とは、大きく違っている。すなわち、「不」は、その動作を直接的に否定するのであって、その動作を発動する意思を否認することが多いのであるが、「非」は、その次の動作を一つの事柄として、その場において主題となっていることは、その次の事柄とは「ちがっている」ということを述べるものであって、その否定は、一種の同一性の否定ともいうことができる。例えば、

（11）孟之反不_レ伐。奔而殿，将入門，策其馬曰，非_レ敢後也，馬不_レ進也。（論語 6—15）

（12）昔者大王居邠，狄人侵之，去之岐山之下居焉。非_レ折而取之，不得已也。（孟子 1 b 14）

（13）我非_レ愛其財而易之以羊也。宜乎百姓之謂我愛也。（孟子 1 a 7）

「不」も、古くは、このようにも用いることができたものであろうと考えられる。次の例（14）などは、その例である。しかし、このような例も、春秋以後、全体として、きわめて少ない。それで、「不」の通常の用法としては、上例（11）～（13）の「非」を「不」におき換えることはできない。

（14）上之所賞，命固且賞，非_レ賢故賞也。上之所罰，命固且罰，不_レ暴故罰也。（墨子・非命上 9—8）

〔「非賢故賞也」は、「賢故賞」（賢であるから賞する）ということとは「ちがっている」というこ

（注14）王力：《中国語法理論（上冊）》（1954年，中華書局）p. 231，《漢語史稿（中冊）》（1958年，科學出版社）p. 352を参照。

とを述べているものである。その下文の「不暴故罰也」の「不」は、上文の「非」と互文的に用いられているのではあるが、やはり、その否認の心意が、強く働いていたものであろうかと考えられる。]

また、「非」によるこの種の否定は、上例(11)などにおいて、明らかに見られるように、ほかの人によってそのように推測されていることなどについて、その誤解を解明しようとするような場合に用いられていることが多い。このように、ほかの人の推定・判定などについて反論して、その事理を明らかにしようとすることは、「非」の用法の大きな特徴であるということができる。

「非」は、上述のように、動作を表わす語句についての否定に用いられていることは多いのであるが、性状の否定に用いられていることは、比較的少ない。しかし、次のような例によっても、上述の「非」の用法の特徴は、やはり、明らかに看取することができる。

- (15) 君子生非異也，善仮於物也。(荀子・勸学1—5)

〔《大戴礼》〈勸学〉には、「君子生」が、「君子之性」となっている。〕

- (16) 為是其智弗若与。曰，非然也。(孟子6 a 9)

〔《孟子》の中に、「非然也」といっているのは、この1例だけであるが、「不然」または「不然也」といっている例は、少なくない。例えば、前の3の例(8)など。〕

なお、〈孫疏〉には、この「非然也」につき、「言不然也」と注している。〕

- (17) 城非不高也，池非不深也，兵革非不堅利也，米粟非不多也，委而去之，是地利不如人和也。(孟子2 b 1)

上例(15)の「非異」は、「不異」ということもできないわけではない。しかし、「不」は、前述のように、その性状を直接的に否定するものであって、その性状について、話し手の判定の心意が加えられていることが多いものである。それで、この例において、「不異」とするとすれば、それは、話し手が否定的な判定を下したことになるのであるが、しかし、原文の「非異」は、単に否定的に判定をしたものではなく、前に述べた例(11)などの場合と同じように、一般に「異」と誤解されているのに対して、事実はそれとは「ちがっている」ことを述べるものである。例(16)の「非然也」も、同様であって、そのように誤解されることのないように、特に説明しているものである。「非」は、このように、反論して解明するような場合に用いられるものである。それで、通常、性状を表わす語句についての否定には、当然、「不」を用いることが多いわけであるが、例(16)についての〈孫疏〉のように、原文の「非」を、ただちに「不」と解することは、やはり、適切な解説とはいえない。

「非」が、ほかのものの推測または判定についての否定的な解明であることは、上例(17)のような形式の表現においても、よく看取することができる。これは、ある性状について、「不」という判定が加えられていることについて、実際は、それとは「ちがっている」ことを論じているのである。それで、この例(17)における「非」は、次の例(18)におけ

る「不為」に、きわめて近いものともいうことができる。しかし、「不為」は、話し手の主体的な意見としての否認であるが、「非」は、実際は、それとは相違しているものであることを解明するものである。「非」によって否定している文末には、前述のように、提示・解明の語気を表わす「也」が用いられていることが多いのに対して、次の例(18)においては、断定・決定の語気を表わす「矣」が用いられていることからしても、このことが、明らかであろう。

(18) 齊卿之位、不為不小矣、齊滕之路、不為近矣、反之而未嘗与言行事、何也。(孟子 2b6)

以上のように、「非」は、「不」・「否」とは、否定詞としては、同じ類のものであったということができる。また、「不」は、古くは、かなり幅広く用いられたもので、「非」に近いようにも、多く用いられたもののように考えられる。しかし、次第に、その機能が分化されるようになったものにちがいがなく、春秋以後においては、動作・性状の直接的な否定には「不」、同一性の否定や誤解などに対する否定には、通常、「非」が用いられるようになってきているものということができる。

5 「無」と「亡」・「毋」

「無」は、前述のように、「𠂔」の略体で、秦以後の字体である(注15)。その「𠂔」を「有」に対する意味の否定詞として用いたのは、その字音を仮借したものである。甲骨文には、この意味の否定詞としては、「亡」と「毋」とが用いられていたのであるが、金文においては、「𠂔」も多く用いられるようになっていく。「毋」は、甲骨文や金文においては、実は、「母」の字が、用いられていた。もちろん、その字音を仮借したものである。「母」という字形は、この仮借字に代るものとして、秦以後に作られたものである。この「母」に対して、「亡」は、篆書では、「𠂔」と書かれていたもので、この字形は、「人が曲がりくねったところに隠れる」ということを表わしているものである。《説文》には、「逃也」と説いているが、藤堂明保氏の《漢字語源辞典》にしているように、「隠れて見えない」ということが、その基本義であったものということができる。「亡」が、「逃亡」・「死亡」・「滅亡」・「亡失」などの意味に用いられるのは、いずれも、この基本義によるものであり、また、「有」に対する意味の否定詞として用いられるのも、また、この基本義によるものにちがいない。

「亡」と「毋」とは、上述のように、西周以前から、否定詞として用いられていたもの

(注15)《説文》には、「無」の字の古文の「奇字」として、「无」があげられている。この字形については、諸説があるが、戦国以前からの略体と見るべきものであろうか。

なお、《易経》の中には、この「无」が多く用いられていて、「無」は、1字もない。また、《莊子》の中にも、この「无」が多く用いられていて、「無」は少ない。

である。しかし、《書経》や《詩経》などにおける使用数などからしても、いずれも、次第に、「無」に吸収されるようになっていたものということができる。その使用数・使用率は、次のようになっている。

〔表 1〕 (注16)

		虞夏書	商周書	雅頌	国風	論語	孟子
総字数		3,454	13,479	18,985	10,660	15,917	35,374
亡	使用数	0	0	0	4	9	3
	使用率				0.04%	0.06%	0.01%
罔	使用数	3	84	9	2	0	1
	使用率	0.09%	0.62%	0.05%	0.02%		
毋	使用数	0	0	3	2	7	0
	使用率			0.02%	0.02%	0.04%	
無	使用数	8	113	181	116	131	265
	使用率	0.23%	0.84%	0.95%	1.09%	0.82%	0.75%

《書経》・《詩経》の中には、上表に見られるように、「亡」に代って、「罔」が多く用いられている。「罔」は、《説文解字》にも、「亡声」のものと説かれており、もちろん、同じような発音のものであったにちがいない。わざわざ、「罔」という字形を借用しているのは、《書経》においては、「非」の代りに、よく「斐」が用いられ、《詩経》においては、多く「匪」が用いられているのと同じようなことで、恐らくは、その字体を重々しいものにしようとしたものかと考えられる。しかし、この「罔」という字体を用いることは、春秋以後には、一般に行われなくなっている。例えば、《孟子》の中には、上表のように、「罔」も1例見られるのではあるが(5b4)、その1例は、実は、《書経》の〈康誥〉の文を引用したものの中に用いられているものである。

また、上表に見られるように、「罔」は、〈商周書〉においては、かなり多く用いられているのであるが、〈詩経〉においては、きわめて少なくなっている。それとは反対に、「無」は、〈商周書〉においては、「罔」を若干越える使用率であったのであるが、《雅頌》においては、その「罔(亡)」の使用率の約20倍の高い使用率になっている。「無」が「亡(罔)」に代るものになって来ていたことが、明らかであろう。

(注16) 〈虞夏書〉・〈商周書〉の総字数と、その否定詞の使用数は、《尚書通検》によって計算し、〈雅頌〉・〈国風〉の総字数は、《五經索引》、その否定詞の使用数は、哈仏燕京学社の《毛詩引得》によって計算した。《論語》・《孟子》における使用数と使用率は、前に1においてあげたものを、対照のために、あげたものである。

なお、《書経》・《詩経》の漢語史の資料としての取扱いについては、これまで、「《書経》語法札記」の中でも、しばしば述べて来たことであるが、《書経》の中、〈虞夏書〉は、その虚詞の用いのかたの上からいっても、後出のものにちががなく、全体として、〈商周書〉がもっとも古く、それについて、〈雅頌〉・〈国風〉という順になっているものということができる。

「無」(muīag)と「亡」(miang)とは、その字音は、きわめて近い関係にあったものである。その韻部は、「魚」部と「陽」部とに分れているのではあるが、その韻尾が、「g」と「ng」で、いわゆる対転の関係にあるものであり、「陽」部は、この点からして、「魚」部の一類ともいうことができるものである。してみれば、「無」の音は、恐らくは、「亡」の音が、口語的になまって来たものであろうかと考えられる。この「無」の発達とともに、「亡」は、次第に、文語的なものになって来ていたものにちがいない。それで、〈商周書〉においては、その雅馴なものとして、「罔」もなお多く用いられていたのであるが、《詩経》においては、その口語化した「無」が、主力を占めるようになったものということができる。《論語》においては、〈国風〉とほぼ同じ程度に、「亡」が用いられているのであるが、次の例(1)のように、「無」を用いているのが、その通常の言いかたであり、例(2)のように、「亡」を用いているのは、それに対して、かなり固い言いかたのものであったにちがいない。

(1) 無臣而為有臣，吾誰欺。欺天乎。(論語9・12)

(2) 亡而為有，虚而為盈，約而為泰，難乎有恒矣。(論語7・26)

次に、「母」は、テキストによって、「無」と入れ替っていることが、かなり多いものである。例えば、上表に《論語》の中に見られるものが7例あることをあげたのは、前に(注2)に述べたように、《四書索引》によったものである。《四書索引》は、朱子の《四書集注》によっているものであり、また、その《四書集注》は、だいたい、「唐石経」によっているものである。しかし、《四書集注》においては、「無」が用いられているものが、「唐石経」においては、「母」になっているところが1例ある(12・23)。また、「唐石経」では、「無」が用いられているものが、古くわが国に伝来のテキストによる《正平版・論語》・《天文版・論語》などにおいては、「母」になっているものが4例(6・13, 12・21, 13・17に2例)、その反対に、「唐石経」では、「母」が用いられているものが、《正平版・論語》・《天文版・論語》などにおいては、「無」になっているものも3例ある(9・25, 11・24, 12・23)。また、《詩経》の中には、《毛詩引得》によれば、上表にあげたように、「母」が5例見られるのであるが、阮元の《毛詩校勘記》によれば、その中の2例は、テキストによっては、「無」となっているものであり(邶風・谷風35, 小雅・小宛196)、また、その5例以外に、「無」が、テキストによっては、「母」になっているものも、1例ある(鄭風・大叔于田78)。

「母」は、以上のように、「無」と入れ替っていることが、かなり多いものである。してみれば、「無」と同じ類のものとされるようになって来ていたものと考えられる。また、「母」は、前述のように、甲骨文の中にも、「亡」とならんで、用いられていたものなのであるが、しかし、上表に見られるように、《書経》の中には、1例もなく、この種の否定詞としては、「罔」とならんで、「無」が多く用いられている。このことからすれば、「母」は、かなり早くから、「無」に吸収されるようになって来ていたものと考えられる。それでも、春秋の

頃までは、日常の口語の中においても、なお、いくらか用いられていたものと考えられる。《論語》の中には、上述のように、数例用いられており、《左伝》の中にも、25例見られる。しかし、ますます、「無」に吸収されるようになって来ていたものにちがいない。《孟子》の中には、上表のように、1例も見られない。なお、《荀子》においても、2例見られるだけであり、《莊子》の中には、1例も見られない（注17）。

また、「母」と「無」とは、その字音は、もともと、かなり違っていたものと考えられる。「母」は、前述のように、もともとは、「母」の字音を仮借したものである。「母」(mu^hg)は「之」部、「無」(mu^hag)は「魚」部、その韻部は、かなり違っている。しかし、上述のように、この両者が、同じ類のものとして、多く入れ替って用いられていることからして、「母」は、その発音の上においても、次第に、「無」に近づいて来ていたものと考えられる。また、その字体は、前述のように、秦以後、「母」の字を仮借せずに、「母」とするようになったのであるが、この字体が、漢代の「今文」において、「古文」における「無」に代って用いられることが多かった（注18）。それで、その字形は、違っていても、その字音は、漢代においては、もはや、全く同じようになっていたものであろうと考えられる。なお、《釈文》においては、もちろん、「母」について、「音無」と注されている（注19）。

なお、《説文》には、「母」について、「止之也」と解説しており、禁止の意味を表わすものとしている。これは、漢代においては、前述のように、「無」とともに、「母」も用いられるようになっていたのであるが、今文経においては、禁止の場合には、多くこの「母」の字の方を用いるようになっていたことによるものである。阮元の《経籍纂詁》の中に、「母」の字について、《儀礼》の《鄭注》の中に、「古文」には「無」の字になっていた、と注しているものが、4例あげられているのであるが、それらは、いずれも、禁止の意味のものである。鄭玄は、この今文経の用字法によって、経文を整理し、許慎は、それによって、《説文》の解説をしていたものといえることができる。また、《礼記》の中においては、「無」は、ほとんど、「有」に対する意味のものに用いられ、「母」は、ほとんど、禁止に用いられているのも、やはり、この用字法によっているものである。このように、その用法によって、その字体を区別して用いることもなされていたのではあるが、その語音は、もちろん、同一のものであったと考えられる。

（注17）《左伝》・《荀子》・《莊子》の中における否定詞の使用数は、哈仏燕京学社の「引得」によって調査した。

（注18）「母」についての《説文解字段注》を参照。

（注19）例えば、《詩経》〈鄭風・大叔于田 78〉の「将叔母狃」、および、《論語》（1・8）の「母友不如己者」についての《釈文》を参照。なお、この「母」の字は、「唐石経」においては、ともに「無」の字になっている。

6 「不」・「無」と「弗」・「勿」

「弗」と「勿」とは、甲骨文の中においても、否定詞として用いられていたものであるが、《書経》・《詩経》の中においても、その用例は、あまり多いものではなかった。次に、まず、その使用数と使用率とを、表によってあげておくことにする。

〔表 2〕 (注20)

		虞夏書	商周書	雅 頌	国 風	論 語	孟 子
総 字 数		3,454	13,479	18,985	10,660	15,917	35,374
弗	使用数	6	54	14	14	5	37
	使用率	0.17%	0.40%	0.07%	0.13%	0.03%	0.10%
(不)	使用数	13	278	402	226	580	1,071
	使用率	0.37%	2.06%	2.12%	2.12%	3.64%	3.03%
勿	使用数	0	20	9	10	13	24
	使用率		0.15%	0.05%	0.09%	0.08%	0.07%
(無)	使用数	8	113	181	116	131	265
	使用率	0.23%	0.84%	0.95%	1.09%	0.82%	0.75%

まず、「弗」について述べよう。

「弗」の字形については、諸説があるが、その字義は、藤堂明保氏のいわれるように、もともと、「拂」の原字と見るべきものと考えられる(注21)。この字が、否定詞として用いられるのも、その「はらいのける」というような意味によるものにちがいない。また、この「弗」は、怒った顔色を表わすのに、「𠂔」として用いられていることなどからしても、否定詞としても、かなり強い語気を表わすものであったと考えられる。

すでに述べたように、古代語における否定詞は、「不」と「無」とが、その二つの中心になっていたのであるが、「弗」は、正しく「不」の類の否定詞である。次の例(1)・(2)・(3)などのように、テキストによっては、「不」となっているものも多く、また、例(4)・(5)について注記しておいたように、古くから、「不」と解説されていることも多い。

- (1) 九載，績用弗成。(書経・堯典 p. 5, 1—20)

〔《史記》〈五帝本紀〉(1—30)には、「功用不成」となっている。〕

- (2) 子謂冉有曰，女弗能救乎。対曰，不能。(論語 3・6)

〔この「弗」の字は、「皇本」や《正平版・論語》などにおいては、「不」になっている。〕

- (3) 獲於上有道，不信於友，弗獲於上矣。(孟子 4 a 13)

〔《礼記》〈中庸〉(31—12)には、「弗」が「不」になっている。〕

(注20) 《書経》・《詩経》における「弗」・「勿」の否定詞としての使用数は、前に〔表1〕について、(注16)に注記しておいたのと同じように、それぞれ、《尚書通檢》と《毛詩引得》とによって計算した。また、「不」・「無」の使用数も、同様にして計算し、対照のために、あげておいた。

(注21) (注2) にあげた藤堂明保氏の《漢字語源辞典》を参照。

(4) 司馬弗正。(礼記・燕義 47-1)

〔鄭注〕に、「弗、不也」とある。]

(5) 弗如也。吾与女弗如也。(論語 5・9)

〔皇疏〕に、「弗、不也」とある。]

上述のように、「弗」は、「不」と同じ類の不定詞であるということができる。しかし、もちろん、その否定詞としての機能が、全く同じものであったとはいえない。その機能の上に区別しなければならないような相違がない場合には、必ずや、その中の優勢なものが、他のものを吸収してしまうようになるものである。前述の「亡(罔)」が「無」に吸収されるようになったのも、その例である。「弗」は、上述のように、西周以前から用いられていたものであるが、その使用率は、《書経》の〈商周書〉においても、「不」に較べて、遙かに低いものであった。しかし、その後も、だいたい、その低い使用率のままで、続いて用いられて来ているのであって、《孟子》においても、上表のように、0.1%の使用率を保っている。「亡(罔)」が急速に「無」に吸収されるようになって来ていたのとは、大きく違っている。それで、「弗」は、「不」と同じ類の否定詞であることには違いないのではあるが、その機能の上において、やはり、「不」とは大きく異なるところがあったものにちがいない。

「弗」は、上述のように、「不」とは異なるところがあったものにちがいない。「弗」が、動作・性状の否定に用いられるという点においては、「不」と同じである。してみれば、「不」との相違は、そのような語法的な用法の上での相違ではなく、その否定のしかたの上における語気の相違であったものと考えられる。すなわち、「弗」の方が、その否定の語気が、特に強いものであったろうと考えられる。後漢の何休が「弗」について、「不之深者也」と解説しているのは、よくこのことを明らかにしているものということができる(注22)。また、釈大典も、その《文語解》において、この何休の解説に着目して、「弗」は、「不」よりも重く強いものであるとして、次のような例をあげている。

(6) 啓呱呱而泣，予弗子。(書経・皋陶謨 p. 26, 2-82)

〔《史記》〈夏本紀〉(2-38)には、「予不子」となっている。]

(7) 明日徐公来。孰視之，自以為不如。窥镜而自視，又弗如遠甚。(戦国策・齊一，8-73)

「弗」と「不」との相違は、以上のように、その否定の語気の強弱にあったものということができる。しかし、古代語の文献の中には、このような語気の相違のある「弗」と「不」とが、修辭的に利用されているものと考えられるものも、少なくない。すなわち、一つの文の中において、同一の語を反復して用いることを避け、なるべくその字面を変えて、その文が単調になることを避け、全体として生彩のあるものにしようとすることは、漢語の

(注22)《公羊伝》〈僖公26年〉の「侈也」の下注に見える。なお、《公羊伝》〈桓公10年〉の「其言弗遇何」についての注にも、「弗者，不之深也」と解説している。

書きことばにおける古来の修辭法であつたのであつて、「弗」と「不」とが、この「変文」の修辭のために用いられていると考えられるものも、少なくない。次の例などは、このような修辭によるものということができるものであろう。このような文例を、單に形式的に見て、この「弗」と「不」との本質的な相違を見のがしてはならない。

(8) 曠安宅而弗居，舍正路而不由，哀哉。(孟子 4 a 11)

(9) 食而弗愛，豕交之也。愛而不敬，獸畜之也。(孟子 7 a 37)

次に、「勿」についても、上述の「弗」と、ほぼ同様に考えることができる。

「勿」の字形については、《説文》には、大夫・士の建てる旗の象形で、その柄に三つの吹き流しがしがついているものと解説している。この「勿」が、否定詞として用いられるのは、やはり、仮借字としての用法であらう。甲骨文においても、その原義として用いられているものはなく、もっぱら、この仮借の用法のものとして用いられていた。

「勿」の否定詞としての使用率は、前にあげた表に見られるように、「無」に較べて、遙かに低い。しかし、「弗」の場合と同じように、《書經》・《詩經》から《孟子》に至るまで、だいたい、同じような使用率になっているのであつて、「亡」のように、急速に「無」に吸収されるようになっていたものとはいふことができない。

「勿」と「弗」とは、古代語においても、その韻部が、同一のものであつた。

弗 *piuat* (隊術部) (不 *puīæg* 之部)

勿 *miuat* (隊術部) (無 *muīag* 魚部)

「勿」は、このように、その字音の上において、「弗」と大きな共通点をもっている。それで、まず、この点からいっても、「勿」と「無」との関係は、「弗」と「不」との関係と同様であつて、「弗」が「不」の類の強調的な否定詞であつたのに対して、「勿」は、「無」の類の強調的な否定詞であつたものであらうと考えられる。「無」に較べて、西周から戦国に至るまで、その使用率が、一貫して、遙かに低い、ということも、それが特に強調するものであつたことによるものと考えられる。

「勿」と「無」とが、同じ類の否定詞であつたことについては、その証左となることが多い。まず、次の例(10)に見られるように、「無」と全く同一の句型に用いられていることが多く、また、例(11)のように、変文的な修飾に用いられているものもある。更に、特に注意すべきことは、例(12)におけるように、「無」と同じく、禁止に用いられていることが多いということである。

(10) 愛之，能勿勞乎。忠焉，能勿誨乎。(論語 14・7)

[この例における「勿」は、語法的には、「無」に改めることができる。例えば、

法言之言，能無從乎。……巽与之言，能無說乎。(論語 9・24)

また、この例(10)の「勿」は、《白虎通》〈諫諍篇〉の引用には、ともに「無」になっている。]

(11) 雞豚狗彘之畜，無失其時，七十者可以食肉矣。百畝之田，勿奪其時，八口之家，可

以無飢矣。(孟子1a3)

(12) 無友不如己者。過則勿憚改。(論語1・8)

〔この例も、変文的な修辭のものといえることができる。朱子の〈集注〉には、「無・毋通、禁止辭也」と説き、また、「勿」についても、「勿亦禁止之辭」と説いている。しかし、同じく禁止に用いられているのではあるが、もちろん、「勿」の方が、その語気が強かったものにちがひなく、その語気の相違が、修辭的に用いられているものと考えられる。

なお、この例の「無」は、《釈文》のよったテキストにおいては、「毋」となっていた。また、〈子罕篇〉(9・25)にも、この例と同一の文があげられている。ただ、〈子罕篇〉の文においては、「皇本」は、この例文と全く同じであるが、「唐石經」では、「無」が「毋」になっている。〕

「勿」は、上例(12)のように、禁止に用いられていることが、「無」に較べて、特に多い。《論語》・《孟子》における「勿」と「無」との禁止の用例数は、下記のようになっている。

「勿」《論語》使用総字数13, 禁止の用例数10

《孟子》使用総字数24, 禁止の用例数19

「無」《論語》使用総字数131, 禁止の用例数8

《孟子》使用総字数265, 禁止の用例数13

「勿」は、上記のように、「無」よりも、その使用数が、遙かに少ないものである。その少ないものの中において、禁止に用いることは、上記のように、かえって多い。これは、やはり、「勿」は、その否定の語気が強かったことによるものであり、禁止には、その強い語気のものが、よく用いられたものといえることができる。

「弗」と「勿」とは、上述のように、それぞれ、「不」と「無」の類の強調的な否定詞と見るべきものといえることができる。しかし、中国においては、現在、「弗」・「勿」は、それぞれ、「不之」・「無之」にあたる機能のものとする説が、多く行われている。この説は、まず、丁声樹氏が、「弗」について説いたことに始まるもので、ついで、呂叔湘氏が、その説を承けて、「勿」についても、同様に見るべきことを論じ、この両氏の説が、楊伯峻氏や王力氏などにおいても、ほぼ、そのままに取り入れられているのである(注23)。この丁声樹氏や呂叔湘氏などの説は、「弗」・「勿」の後の動詞は、賓語を取っていることが、きわめて少ないということに着目し、それを大きく取りあげて、そのことを説明するために説き出されたものである。

例えば、王力氏も、多数の先秦の文献について見ると、「弗」・「勿」の後の動詞が、賓語をもたないということは、争うことのできない事実であるとし、それで、「弗」・「勿」は、代詞賓語の機能を兼摂しているものとしている。王力氏は、その典型的な例として、

(注23) 丁声樹：〈釈否定詞弗・不〉《慶祝蔡元培先生六十五歲論文集》(1935年)、呂叔湘：〈論毋与勿〉《漢語語法論文集》(1955年)、楊伯峻：《文言語法》(1955年、北京大衆出版社)8・17、王力：《漢語史稿(中冊)》(1958年、科学出版社)pp. 324~327を参照。

次のような例をあげている。

(13) 天亦縦棄之而弗葆(墨子・非命上9—10)

〔王力氏は、この例について、「縦棄」(放棄の意味)の後には、「之」の字があるが、「弗葆」(葆は保に同じ)の後には、「之」の字がない、と注記している。

なお、《墨子》の中に、次のような例もあることに、注意しておかなければならない。

天亦縦棄紂而不葆。(天志中7—19)〕

(14) 子路問事君。子曰、勿欺也、而犯之。(論語14・22)

〔王力氏は、この例についても、「勿欺」の後には、「之」の字がなく、「犯」の後には、「之」の字がある、と注記している。〕

以上のように、「弗」・「勿」を、それぞれ、「不之」・「無之」にあたる機能のものと見ることは、大きな誤りであるといわなければならない。この説は、上述のように、「弗」・「勿」の後の動詞は、賓語を取っていることが少ない、ということに着目したものである。しかし、その説は、そのことを過大に取りあげて、大きな誤認をしたものといわなければならない。

まず、「弗」・「勿」の後の動詞が、賓語を取っていないことが多いことは、事実である。しかし、否定句において、その動詞が賓語をもたないことは、古代語においては、一般に多く見られることであって、特に「弗」・「勿」にかぎったことではない。上にあげた例(13)について注記しておいたように、「弗葆」は「不葆」とも書くことができるのである。それで、この「弗葆」というような例を過大視して、その「弗」を「不之」にあたる機能のものとすることはできない。

また、「弗」・「勿」は、その後の動詞が賓語を取っていることは、「不」・「無」に較べていえば、きわめて少ない、ということは、たしかに事実である。しかし、また、「弗」・「勿」は、「不」・「無」に較べて、その使用例のきわめて少ないものであることを忘れてはならない。それに、上述のように、否定句においては、一般に、賓語を取らないことが多いものなのであるから、「弗」・「勿」の後の動詞が賓語を取っていることが少ないことは、「弗」・「勿」における大きな特性として、特に取り上げる必要のないことのように考えられる。

更に、「弗」・「勿」の後の動詞が、賓語を取っていることは、必ずしも、きわめて稀なことではない。丁声樹氏の「弗」についての論文については、すでに、黄景欣氏が、詳細な反論を発表しており、「弗」の後の動詞が、賓語を取っていることについても、その例を50例あげている(注24)。呂叔湘氏も、「勿」について、その次の動詞が賓語を取っていることがあることに気づいていた。特に、《書経》に用いられている「勿」20例の中、その半数以上が、「無之」とはいえないものであり、更に、金文・甲骨文においても、同様の用例が

(注24) 黄景欣：〈秦漢以前古漢語中的否定詞“弗”“不”研究〉《語言研究3》(1958年)を参照。

多いことを認めていた。しかし、呂叔湘氏は、なお、春秋戦国の時代における「勿」が、「無之」の機能のものになっていることは、否認することのできない事実であるとし、この時代の文献の中に、若干の違例の用例があっても、それによって、この一般的な「通律」を破ることはできない、と述べている。

この呂叔湘氏の所説には、大きな問題がある。呂叔湘氏も、西周以前における「勿」は、「無（毋）」よりも、語気の強いものであったことを認めている。それで、上述の呂叔湘氏の説によれば、西周以前における強い語気の否定詞の「勿」は、西周末期において消滅し、春秋以後には、「無之」の機能の新しい「勿」が、「通律」として、一般に用いられるようになって来た、ということになる。しかし、それでは、漢語史の上に、大きな断層があったようなことになるわけであって、賛成することはできない。

また、呂叔湘氏は、その違例の用法のものとして、《論語》(19・19)・《孟子》(1b5)、《左伝》(哀公12年29—80)、《莊子》(人間世2—24)、《戦国策》(斉三、10—87、韓一、26—32、韓三、28—54)の中から、計7例をあげ、その中の2例(斉三と韓三)は、原文に誤りがあるとする可能性もあるとし、また、そのような違例の用例は、「甚少」であるとしている。しかし、わたくしが、これまでに調査したところからしても、必ずしも、「甚少」とはいうことができないものとする。次に、呂叔湘氏があげた以外のものとして、なお、10例あげておくことにする。

- (1) 勿恤其孚。(易経・泰・九三)
- (2) 勿用師。(易経・泰・上六)
- (3) 勿問之矣。(易経・益・九五・象)
- (4) 下怨上，令不行。而求敵之勿謀己，不可得也。(管子・權修1—8)
- (5) 人言善，亦勿聽。人言惡，亦勿聽。持而待之，空然勿兩之，淑然自清。(管子・白心2—70)
- (6) 客絶水而来，勿迎之於水内。(孫子・行軍9—2)
- (7) 無要正正之旗，勿擊堂堂之陳，此治變者也。(孫子・軍争7—15)
- (8) 賞賢罰暴，勿有親戚弟兄之所阿。(墨子・兼愛下4—28)
- (9) 思物而物之，孰与理物而勿失之也。(荀子・天論11—35)
- (10) 不可与往者，不知其道。慎勿与之。(莊子・漁父10—6)

7 「未」と「無」・「不」

「未」は、《論語》における使用率は、前にあげたように0.36%、「無」につぐ高い使用率のものである。しかし、甲骨文にも、また、金文にも、否定詞としての用法はなく(注25)、

(注25) 白川静：《説文新義》(14—3019)を参照。

また、《書経》・《詩経》の中においても、その用例は、次のように、あまり多くはない。それで、「未」は、西周以前から、主要な否定詞として用いられていたものではなく、主として、春秋以後、多く用いられるように発達して来たものといえることができる。

〔「未」の用例数〕（注26）

《書経》〈虞夏書〉1例, 0.03%

〈商周書〉11例, 0.08%

《詩経》〈雅頌〉21例, 0.11%

〈国風〉17例, 0.16%

「未」は、「勿」と同じ類のものであったと考えられる。「未」(miuəd)と「勿」(miuət)とは、その韻部は、ともに、同じく「隊術」部のものである。その韻尾に、「d」と「t」との相違があるのではあるが、それは、いわゆる対転の関係のものである。「未」は、それで、声母mの「無」の類の否定詞の中においても、特に「勿」に近かったもののように考えられる。しかし、同じく「無」の類ではあっても、「勿」は、前述のように、その語気の強かったものであるのに対して、「未」は、その語気が弱かったものであろうと考えられる。

「無」は、禁止にも用いられ、また、「勿」は、前述のように、むしろ、多く禁止に用いられるのに対して、「未」は、禁止に用いられることがないのも、その語気が弱いものであったことによるものと考えられる。このことが、「未」における本質的な特徴であらうと考えられる。

「未」は、その特徴的な用法として、まず、多く現在までの動作の否定に用いられる。「未」が、漢文の訓読において、「イマダ……ズ」と再読されることになっているのも、このような用法が、その特徴になっていることによるものである。楊樹達氏の《詞詮》などにも、「不曾也」と解き、現代語の「還沒有」と同じであると説かれている。「未」のこのような用法は、前に（注9）として述べたように、「無」は、禁止のほか、願望を表わすこともできる、というようにも説かれているものであることと、大いに異なるものといわなければならない。「未」が、このように、多く現在までの否定に用いられるのは、その語気が弱く、命令には用いられず、将来にわたってまで、強く否定するものではないことによるものにちがいない。例えば、

(1) 君子之至於斯也、吾未嘗不得見也。(論語3・24)

(2) 已矣乎。吾未見能見其過而内自訟者也。(論語5・27)

(3) 文武之道、未墜於地、在人。(論語19・22)

上例(1)に見られるように、「嘗」が用いられている場合、「不曾……」といわずに、通例、「未」で否定することになっている。現在までの否定には、「未」が慣用されるよう

(注26)「未」の使用例数は、《尚書通檢》、および、《毛詩引得》によって計算した。

になっていたことによるものということができる。また、「未」による否定文の文末に語気詞を用いる場合には、通例「也」が用いられている。これは、その現在の事態を明らかに示そうとするものということができる。

「未」は、上述のように、現在までの否定に用いられ、その将来までも否定するものではない。それで、「未」は、近い将来に起ることを予期しているような場合に用いられていることが多い。上例(3)の「未墜於地」は、やがて「地に墜ちる」ということを予期している発言ともいうことができるであろう。また、「未亡人」(左伝・莊公28年3—82)が、寡婦みずからの謙称として用いられるのも、もちろん、その死亡の近いことを予期していることによるものである。「未」が、このように、近い将来における可能性を表わすもののように用いられるのも、その否定の語気が弱いものであったことによるものということができる。「未」は、次のように、「将来」というような意味の用法が、《荀子》の中にすでに用いられるようになっていたことに、よく注意しておかなければならない。

(4) 凡刑人之本，禁暴惡惡，且敬其未也。(荀子・正論12—10)

〔楊倞の注に、「敬，読為懲。未謂將來。」とある。《荀子》のこの文は、《漢書》の〈刑法志〉にも、ほぼ、そのまま引用されている。〕

「未」は、また、その弱い語気のものであることからして、おだやかに婉曲に否定するような場合に、よく用いられている。

(5) 子貢曰，貧而無詔，富而無驕，何如。子曰，可也。未若貧而樂道，富而好礼者也。

(論語1・15)

〔《論語》の中には、「不若」・「無若」という表現は見られないが、「不如」という表現は多い。

「若」は、「如」に較べれば、やや文語的な固い言いかたのものであったということができるのである(注27)。「未若」は、「不若」よりも、また、「不如」よりも、よりおだやかな言いかたであったと考えられる。次のような例によっても、「不如」は、話し手の強い否認の心意が働いているものということができる。

樊遲請学稼。子曰，吾不如老農。請学為圃。曰，吾不如老圃。(論語13—4)〕

(6) 子張問曰，令尹子文，三仕為令尹，無喜色，三已之，無愠色，旧令尹之政，必以告新令尹，何如。子曰，忠矣。曰，仁矣乎。曰，未知，焉得仁。(論語5・19)

〔《論語》の中には、次のように、孔子が「不知也」と答えている例もある。この例の「未知」は、それよりも、おだやかな言いかたである。

孟武伯問，子路仁乎。子曰，不知也。(5・8)〕

(7) 孟子曰，君子之沢，五世而斬，小人之沢，五世而斬。予未得為孔子徒也。予私淑諸人也。(孟子4 b 22)

(8) 所食之粟，伯夷之所樹与，抑盜跖之所樹与，是未可知也。(孟子3 b 10)

〔楊樹達氏は、その《詞詮》において、この例における「未」は、「不」の意味のものとしている。

(注27) 拙論〈論語における虚詞の特徴——魯語か、雅言か——〉《宇野哲人先生白寿祝賀記念・東洋学論叢》(1974年)を参照。

もちろん、この例における「未」は、「不」にもおき換えることができないわけではない。また、そのように、「不」にもおき換えうるような例は、少なくはない。孫経世の《経伝釈詞補》には、テキストなどによって、「未」と「不」とが入れ替っているような例も、多くあげられている。しかし、やはり、その否定の語気が、大きく違っていたものといわなければならない。]

- (9) 秦人援魏以拒楚，楚人援韓以拒秦，四国之兵敵，而未能復戰也。(戦国策・秦五，7—60)
 [高誘の注に、「敵，強弱等也。未，無也。」とある。この「未」は、例(8)と同じように、「不」ともおき換えることもできるものであるが、高誘が、「無也」と注していることに、よく注意すべきである。「不能」といえば、話し手の判定の心意が、強く働いて来ることになる。次のように、「無能」といえば、そのような判定の心意が加えられているものではなく、事実としての否定になるわけであり、この例の「未能」は、そのおだやかな言いかたのものとすることができる。
 求也爲季氏宰，無能改於其德，而賦粟倍他日。孔子曰，非我徒也。小子鳴鼓而攻之可也。

(孟子4 a 15)]

上例(5)～(9)における「未」は、いずれも、現在までの否定を表わすものではなく、もちろん、近い将来における可能性を表わしているものでもない。わが国の河北景楨が、その《助辞論》の中において、上例(7)を引用して、次のように述べていることは、大いに傾聴すべき達見であったということが出来る。

「未」は、「已」に対す。又「不」の義あり。故に古く「イマダ」とよみ、再び「ズ」とよめり。両義を兼ねる字なり。又別に「已」の反ならぬ「不」の義のみなる「未」あり。《孟子》に、「予未得爲孔子之徒」，孟子は、孔子に遙か後れて生れられたれば、初めから孔子の門には及ばれぬ筈なれば、「イマダエズ」とは云ふまじきこと也。ざるを、未(スエ)を期する如く云ふが、辞の緩婉なるなり。故に此の類の「未」は、「不」より婉なりと心得べし(注28)。(巻2・35葉)

なお、「未」は、「無」と同じように、「有」の否定にも用いられる。その否定のしかたは、やはり、「無」よりは、弱かったものにちがいない。

- (10) 人未有自致者也。必也親喪乎。(論語19・17)

[次の例における「無有」は、もちろん、この「未有」よりも、強い否定であったということが出来る。

人無有不善，水無有不下。(孟子6 a 2)]

- (11) 不好犯上，而好作乱者，未之有也。(論語1・2)

[《荀子》の中には、次のように、「無之有也」といっている例が、よく見られる。この例の「未之有也」は、やはり、「無之有也」よりも、その語気のおだやかなものであったにちがいない。]

外危而不内恐者，無之有也。(正名16—25)]

- (12) 自古及今，未嘗有兩而能精者也。(荀子・解蔽15—19)

[このように、「未嘗有」と言っている例は、よく見られるが、「無嘗有」と言っている例は、見られない。「未嘗」が、一つの慣用的な言いかたになっていたことによるものであろう。]

(注28) 現代語における「未免」と「不免」などの相違も、もともと、この「未」における婉曲なる語気によるものということができる。

8 「莫」と「無」

「莫」(mak)も、その声母mの類のもので、やはり、「無」の類の否定詞と考えられる。「莫」の字形は、《説文》によれば、草むらの中に日が落ちて、日がくれようとしていることを表わしているもので、「暮」の原字ともいうべきものである。《論語》の中などにおいても、なお、「莫春」(11・25)というようにも用いられている。この「莫」の字を否定詞として用いるのは、やはり、その字音を仮借したものと考えられる。

この「莫」は、甲骨文や《書経》の中には、否定詞として用いられている例はない。《詩経》の中においては、〈雅頌〉に54字、0.28%、〈国風〉に19字、0.18%で、「無」に較べれば、遙かに低い使用率であるが、その「無」の類の中、その強い語気の「勿」、また、その弱い語気の「未」よりは、やや高い使用率であったといえることができる。《論語》・《孟子》においては、「未」の使用率は、のびて来ているのであるが、「莫」の使用数・使用率は、前に1にあげたように、それぞれ、16字、0.1%と57字、0.16%に過ぎない。しかし、《荀子》においては、使用数251字、使用率0.34%となって来ている(注29)。

「莫」は、以上のように、西周以後、否定詞として用いられるようになって来たものであるが、《孟子》の頃においても、その使用率は、なお、あまり高いものではなかった。このように、西周以後に新しく用いられるようになって来た否定詞であって、しかも、その使用率があまりのびて来ていないのは、その用法に、かなり特殊なところがあったことによるものと考えられる。

「莫」は、上述のように、「無」の類の否定詞というべきものである。「莫」が、次のように、禁止に用いられるのも、「無」の類のもつ用法といえることができる。

(1) 敦彼行葦，牛羊勿踐履。方苞方体，維葉泥泥。

威威兄弟，莫遠具爾。或肆之筵，或授之几。(大雅・行葦246)

〔この例は、〈行葦〉の首章である。〈鄭箋〉には、4句ずつ2章に分けているのであるが、押韻のしかたからしても、朱子が1章としているのによるべきであろう。〕

この詩は、興の体のもので、第6句の「莫」は、第2句の「勿」と、あい応じているものであって、その用語を変えた「変文」的修辭のものである。それで、朱子の〈集伝〉には、〈勿、戒止之詞也〉と解説し、また、「莫、猶勿也」と解説している。〈鄭箋〉には、禁止の用法のものとせずに、「莫、無也」と解しているのであるが、従い難い。なお、第6句の「具」は、〈集伝〉・〈鄭箋〉とも、「俱」と解し、「爾」は、〈集伝〉に、「邇」と解している。〕

(2) 王乃之壇列，鼓而行之，至於軍，斬有罪者以徇曰，莫如此以環墳通相問也。明日徙舍，斬有罪者以徇曰，莫如此不從其伍之命。(国語・呉語19—226)

〔《左伝》の中には、次のように、「無若」といっている例も見られる。〕

其命書云，王曰，胡，無若爾考之違王命也。(定公4年27—27)

この例中の「胡」は、蔡仲の名を呼びかけたものである。〕

(3) 燕人聞之，聚族相戒曰，遇盜，莫如上地之牛缺也。(列子・說符8—17)

〔この上文に、「牛缺者，上地之大儒也」とある。〕

(注29)《荀子》における使用率は、《子書百家》本(光緒1年，崇文書局)によって、その総字数を74,787字として計算した。なお、「莫」の使用数は、哈仏燕京学社の《荀子引得》によって計算した。

(4) 汝唯莫必，無乎逃物。至道若是，大言亦然。(莊子・知北遊7-27)

〔王先謙の〈集解〉に、前2句につき、次のように、解説している。〕

言汝莫期必道在何処，無乎逃於物之外也。〕

「莫」は、上例のように、禁止に用いられる。しかし、「莫」のこのような用例は、先秦の文献には、全体として、きわめて少ない。先秦において、禁止を表わすのには、通常は、「無(毋)」が用いられ、その語気の強いものとしては、「勿」が用いられていた。「莫」による禁止も、上例(2)・(3)などに見られるように、王が宣布するような場合、たがいに戒告するような場合などに用いられていることからしても、通常用いられている「無」よりも、重い語気の禁止を表わすものであったろうと考えられる。しかし、その用例は、きわめて少ないのであるから、先秦における「莫」の主たる用法は、この禁止を表わすことにあったものとはいうことはできない。

先秦における「莫」の主たる用法は、動作・性状を表わす語または連語の前に用いて、その動作者または性状の所有者の存在を否定するということである。この場合、次の(a)・(b)二様の表現がなされている。その(a)式は、「莫」の次に、単にその動作・性状を表わす語または連語だけを用いているものであり、(b)式は、その語または連語の後に、更に「者」が添えられているものである。

(a) 式

(5) 莫我知也夫。(論語14・35)

〔皇疏に、「莫，無也。孔子嘆世人無知我者。」と解説している。〕

(6) 治地莫善於助。(孟子3 a 5)

〔趙注に、「言治土地之賦，無善於助者也」と解説している。〕

(b) 式

(7) 朝廷必將隆礼義，而審貴賤。若是，則士大夫莫不敬節死制者矣。(荀子・王霸7-35)

〔この下文には、次のように、(a)式の言いかたで述べられている。〕

百官則將齊其制度，重其官秩。若是，則百吏莫不畏法而遵繩矣。〕

(8) 如使人之所欲，莫甚於生，則凡可以得生者，何不用也。使人之所惡，莫甚於死者，則凡可以辟患者，何不為也。(孟子6 a 10)

〔この例は、前半においては、(a)式の表現が用いられている。〕

漢語においては、動作・性状を表わす語は、現代語においても、その動作・性状を抽象化して、一種の抽象名詞のように用いることができるものであって、「事物化」の用法などといわれている。しかし、古代語においては、動作・性状を表わす語は、この「事物化」の用法だけではなく、更に、その動作の動作者やその性状の所有者なども表わすことができたのであって、「人物化」の用法ともいうことができる。そのように、その動作・性状についての人物を表わす場合、春秋以後においては、その語または連語の後に、更に「者」

を添えることが、多く行われるようになって来ていた(注30)。しかし、このような「者」を用いない西周以前からの「人物化」の用法も、なお、多く行われていた。それで、「無」についても、もちろん、同様に、上記の(a)式・(b)式の表現が見られる。

(a)式

- (9) 孩提之童，無不知愛其親也。及其長也，無不知敬其兄也。(孟子7 a 15)

〔「唐石經」は、上文の通りであるが、阮元校刊の「孟子注疏本」や吳志忠校刊の「孟子集注本」などにおいては、この前文の文末の「也」が、「者」の字になっている。〕

なお、《経伝釈詞》は、この「也」を「者」とするテキストにより、それによって、この後文の「也」も、「者」のようなものとしているのは、大きな誤りである。〕

- (10) 人主無賢，如瞽無相。(荀子・成相18-2)

(b)式

- (11) 仲尼之徒，無道桓文之事者。(孟子1 a 7)

- (12) 為其事而無其功者，髡未嘗觀之也。是故無賢者也。(孟子6 b 6)

上述のように、「莫」における用法は、いずれも、「無」に見られるものである。しかし、もちろん、「莫」は、「無」と全く同じ機能のものとはいふことができない。それで、「無」に対して、「莫」の特徴は、いったい、どこにあるのか、この「莫」は、もともと、どういう性質の否定詞か、ということを、よく究明しなければならない。

「莫」の特性を究明する上において、まず、着目しなければならないことは、「莫」は、上述の(a)式に用いられることが、「無」に較べて、きわめて多く、それが、もっとも通常の用法であるということである。それで、楊樹達氏は、その《詞詮》において、「莫」における第一の用法として、「無人」・「無物」の意味と解すべきものをあげて、その詞性を「無指代名詞」とし、その第2の用法として、上述の(b)式の用法のものをあげ、それについては、「無也」と説き、その詞性を「同動詞」と呼んでいる。また、王力氏も、その《漢語史稿(中冊)》(pp. 327~328)において、「莫」は、上古においては、もともと、「否定性的無定代詞」であって、現代語の「没有人」・「没有誰」・「誰也不」，また、「没有什么」・「什麼也不」のような意味に近く、英語の nobody・nothing などに似ているものと述べている。

しかし、このように、「莫」における第一の用法のものの詞性を「無指代名詞」として説明しても、「無」も、また、同様に、「無指代名詞」の詞性をもつことになるのであるから、この説明だけでは、「無」に対しての「莫」の特徴の本質を、よく明らかにすることはできない。また、王力氏は、「莫」は、もともと、「否定性的無定代詞」であるとしているのであるが、もともと、そのような性質の代詞であるものが、どうして禁止に用いられるのであ

(注30)「者」の字は、甲骨文の中には見えず、《書経》においても、〈周書・洪範〉(p. 78, 12-10)の中に、ただ1例用いられているだけである。なお、拙論「『者』の本質的機能とその発展」《金沢大学法文学部論集・文学篇7(1959)》を参照。

うか。この点が明らかにされなければ、やはり、「莫」の全体としての特性が、よくとらえられない。

それでは、この「莫」の本質は、いったい、どのように見るべきものであろうか。このことについては、これまで、まだよく説明されていない。しかし、積大典が、その《文語解》の中に、次の例(13)の文を引用して、その「莫」は、「母或」の2音の合したものであると説いていることは、きわめて注目すべきことと考える。

(13) 莫如楚共王庶子圍，弑其君兄之子員，而代之立。(史記・楚世家 40—25)

〔積大典は、この文の「莫如」は、《左伝》(昭公4年21—13)には、「母或如」となっていることをあげている。なお、その「母」の字は、「唐石経」や「漢文大系本」では、ともに「無」となっている。〕

上例は、積大典が、「莫」が、禁止に用いられるのは、古典においては、例外的なことであることを説明するためにあげているものである。すなわち、積大典は、この例の「莫如」は、《左伝》においては、「母或如」となっているものであり、この例に禁止を表わすものとして用いられている「莫」は、実は「母或」の合音と見るべきもので、このような場合にかぎった例外的なものであることを述べているのである。しかし、上例のような禁止の場合だけではなく、「莫」は、もともと、「無(母)」と「或」との合音のものと見るべきものであって、それが、否定詞として用いられる「莫」の本質であると見るべきもののよう

に考えられる。

まず、この「無(母)或」というような言いかたについて調べてみると、《書経》の中には、「罔或」が3例、「無或」が5例、《左伝》の中には、「無或」が4例、「母或」が3例用いられている。それで、この「無(母)或」という言いかたは、西周以来、かなりよく用いられていた言いかたであったろうと考えられる。また、このような言いかたが多く用いられている中に、その「無」(muiag)と「或」(huək)とが、一つに結合して、「莫」(mak)というように変化して来る可能性は、十分にありうることであろうと考えられる。上にあげた例(13)のように、「無或」が「莫」とおき換えられている例のあることは、その一証であらうと考えられる。

それでは、この「無或」の結合したものとしての「莫」の機能をどのようにとらえるべきであらうか。まず、「無或」は、「無有」に通じて用いられることが多いものであることに注意しなければならない。「有」(hiuag)と「或」(huək)とは、その字音がきわめて近かったものであって、「或」は、よく「有」の意味に用いられているものである。それで、「無」と「或」との結合による「莫」も、当然、「無有」の意味にも用いられるようになっているわけである。「莫」についての前述の(b)式の用例は、この「無有」の意味のものと見るべきものである。「無」と「無有」との相違は、すでに、2において述べたように、単に「無」といっているものよりも、「無有」といっているものの方が、もちろん、より強

い言いかたであったにちがいない。してみれば、「無或」の結合としての「莫」も、やはり、通常の「無」よりも、より強い言いかたであったものにちがいない。それで、上例(13)のように、「莫」によって禁止を表わしているものも、前に例(2)・(3)について述べたように、単に「無」によって禁止を表わしているものよりも、より強い言いかたのものであったと考えられる。先秦において、「莫」が禁止に用いられることが、上述のように、少なかったのは、「無」の強い言いかたとして、西周以前からの「勿」が、なお、広く行われていたことによるものであらうと考えられる(注31)。

次に、注意しなければならないことは、「或」は、上述のように、「有」と通じて用いられることも多いのではあるが、また、ある不定の人物を表わすのに多く用いられるものであり、これが、「或」における主たる用法であるということである。これは、「有」の人物化の用法であるともいうことができるものである。例えば、

(14) 或謂孔子曰、子奚不為政。(論語2-21)

〔集解〕にあげている方注にも、朱子の集注にも、「或」を「或人」と解説している。また、鄭注には、「有人不顯其名而略稱為或」と解説し、また、「或之言有也」とも解説している(注32)。この種の「或」は、古代語においては、「有人」ともいうことができたものである。ある人の発言をいうのに、《論語》の中などにも、「或曰」といっていることが多いのであるが、《孟子》の中には、「有人曰」(7b4)といっている例も見られる。

なお、この種の「或」は、現代語においても、「有人」または「某人」と訳すことができる(注33)。]

「或」は、上例のように、不定の人物を表わすことが多いものであり、それは、「有人」ともいうことができたものである。これが「或」の主たる用法であり、「有」に対しての「或」の特徴的な用法であるといえることができる。それで、「無」とこの「或」との結合による「莫」も、当然、「無有人」の意味に用いられることが多いわけであり、これが、「莫」の主たる用法であり、また、「無」に対しての特徴的な用法であるともいうことができるわけである。王力氏が、上述のように、「莫」は、もともと、「否定性的無定代詞」のものとしているのも、

(注31) 漢以後、この「莫」が、禁止を表わすのに、多く用いられるようになったのは、「勿」が文語的なものとなり、また、「無(毋)」による禁止も、口語としては、次第にすたれて来ていたことによるものといえることができる。次のように、「勿」・「毋」について、「莫」と解しているものが多いことからしても、そのことがわかる。

○「勿」，猶「莫」也。

〔過則勿憚改〕(論語1・8)の皇疏。]

○古人云「毋」，猶今人言「莫」也。

〔毋不敬〕(礼記・曲礼1-1)の釈文に、《説文》の中の解説として引用している。

なお、この《説文》の中の解説は、《古文尚書》・《大禹謨》の「帝曰、毋」についての孔疏の中にも引用されている。]

(注32) 月洞謙：《輯佚論語鄭氏注》(1963年)を参照。

(注33) 楊伯峻：《文言虚詞》(1965年，中華書局)を参照。

また、「有人」が不定の人物を表わすようになることについては、拙論〈「有」による強調の表現について〉《金沢大学教養部論集・人文科学篇2》(1964)を参照。

この用法のものが、多く慣用された結果、一種の代詞ともいうことができるようになっていくことに着目したものである。しかし、そのように、代詞の一種として取りあつかうにしても、英語における nobody や nothing などとは異なるもので、やはり、「或」と同じように、主語以外の位置に用いられることはなく、ただ主語としてのみ用いられるものであることに注意しておかなければならない。

9 その他の否定詞——「靡」・「微」・「蔑」・「末」

春秋戦国の頃における否定詞としては、以上に述べたものが、その常用の主要なものである。しかし、上述のもののほかに、否定詞として用いられているものが、なお、若干ある。次に、それぞれの否定詞に分けて、略述することにする。

○「靡」(miǎo)「歌」部

「靡」も、声母mの類の否定詞である。甲骨文にも、《書経》の中にも、否定詞としての用例はない。《詩経》の中には、全体として、かなり多く、70例見られる。また、特に《大雅》の中に多く、その内訳は、次のようになっている(注34)。

頌 3例, 0.10%

(魯頌1例, 商頌1例)

大雅 31例, 0.47%

小雅 26例, 0.28%

国風 10例, 0.10%

(邶風2例, 鄘風2例, 衛風2例, 唐風3例, 秦風1例)

「靡」は、《詩経》の中においては、以上のように、かなり多く用いられているのであるが、《左伝》の中には、《詩経》の中の詩句を引用しているもの以外には、否定詞としての用例のものは、1例もない。また、先秦の諸子においても、これまでの調査によれば、ただ《管子》に1例、《荀子》に2例見られるだけであって、《論語》・《孟子》を始め、《墨子》・《孫子》、また、《老子》・《莊子》・《列子》の中には、1例も見られない。ただ、《孟子》の中には、《詩経》の詩句を引用したものの中に、2例見られる(注35)。

(注34)「靡」の《詩経》の中における使用字数は、《毛詩引得》によって計算した。

なお、《詩経》の中において、その制作の古いものを多く含むものは、まず、《周頌》であり、それについて、《大雅》と考えられる。《頌》の中においても、《魯頌》と《商頌》は、春秋になってからの制作のものと考えられる。このことについては、なお、拙論《論氣詞としての「其」について——《書経》語法札記5——》(金沢大学教養部論集・人文科学篇9(1971))を参照。

(注35)《左伝》・《論語》・《孟子》・《墨子》・《荀子》・《莊子》は、哈仏燕京学社の「引得」により、《管子》は、成文出版社の《管子引得》、《老子》は、京都大学人文科学研究所の《索引第七・老子》、《孫子》は、東北大学中国哲学研究室の《孫子索引》、《列子》は、山口義男氏編の《列子索引》によって調査した。

以上のような使用状況からして、「靡」は、《詩経》の時代におけるきわめて特殊なものであったといえることができる。また、その《詩経》の中における上記の使用内訳からして、ある辺鄙な地方の方言的なものなどを見ることはできない。「天命靡常」(大雅・文王235)を始めとして、〈大雅〉の中には、特にその用例が多く、使用率が高いことからすれば、恐らくは、周の王朝において用いられていたもので、貴族的な荘重な言いかたのものであったろうかと考えられる。

また、そのような重々しい言いかたの「靡」(miär)は、恐らくは、西周以前からの「亡(罔)」(miang)の音が、貴族的になまって来たものであろうかと考えられる。前に5において、[表1]の中に示しておいたように、「罔」が、〈商周書〉においては、0.62%の使用率であるのに、〈大雅〉においては、その使用数5、使用率0.08%と低くなって来ているのは、西周以前からの「亡(罔)」が、前述のように、西周以後、「無」に吸収されるようになるとともに、《詩経》においては、その一部が、《靡》に吸収されていたことによるものかと考えられる。

「靡」は、上述のように、《詩経》におけるきわめて特殊なものであったのであるが、それは、やがて、すべて「無」に吸収されてしまっている。《爾雅》〈釈言〉に、「靡・罔、無也」と述べられている。やはり、「罔」と同類のものとされ、「無」と解説されている。このように、「靡」を「無」と説くのが、漢以後の通説になっている。上にあげた《詩経》の「天命靡常」における「靡」は、その〈毛伝〉・〈鄭箋〉ともに、「無」におき換えて解説しており、また、《孟子》の中に引用されている《詩経》の詩句の中の「靡」についても、その〈趙注〉は、いずれも、「無」におき換えて解説している(4a8, 5a4)。

○「微」(miuər)「微」部

「微」も、《書経》の中には、否定詞としての用例はない。《詩経》には、〈邶風・柏舟〉(26)に1例、〈邶風・式微〉(36)に2例、〈小雅・伐木〉(165)に2例、計5例用いられている。《左伝》の中には14例、《論語》・《管子》の中に、それぞれ1例、いずれも、仮説の従句に用いられている。《孟子》・《荀子》・《孫子》・《墨子》・《老子》・《列子》などには、1例もなく、《莊子》の中には、2例用いられているが、その中の1例は、やはり、仮説の従句に用いられているものである。

以上のような使用状況からして、「微」が否定詞として用いられたのは、だいたい、春秋の頃に少し用いらただけであって、戦国以後は、通常用語としては、ほとんど、すたれてしまっていたものといえることができる。

「微」は、その声母がm、やはり、「無」の類の否定詞と考えられる。「微」は、次の例(1)について注記しておいたように、古くから、多く「無也」と解説されているものであり、また、次の例(2)・(3)などのような用例を考え合せても、やはり、「無」の類

のものとすべきものと考えられる。

(1) 微管仲，吾其被髮左衽矣。(論語 14・17)

〔《集解》にあげている〈馬注〉に、「無也」と解説されている。〕

(2) 微二子者，楚不国矣。(左伝・哀公 16 年 30—31)

〔《論語》の中の次の例と、全く同じような言いかたのものということができる。〕

魯無君子者，斯焉取斯。(5・3)

なお、この《左伝》・《論語》の中の「者」は、楊樹達氏などは、仮説を表わす助詞として
いるものである。〕

(3) 柳下季曰，今者闕然数日不見，車馬有行色，得微往見跖邪。孔子仰天而嘆曰，然。

柳下季曰，跖得無逆汝意若前乎。孔子曰，然。(莊子・盜跖 9—32)

〔「微」と「無」とが、互用されているのは、変文的な修辭によるものである。〕

「微」は、以上のように、「無」の類のものと考えられるのであるが、恐らくは、その類の中においても、強い言いかたのものであった「勿」のなまったものであろうかと考えられる。「微」(miuər) は、上記のように、「微」部のもの、「勿」(miuat) は「隊術」部のもの、その韻部は、異なっているのではあるが、「隊術」部は、「微」部の中の一類ともいうことができるものであって、その字音は、きわめて近い関係にあったものである。また、「微」は、上述のように、多く仮説の従句に用いられるのも、もともと、強い語気の「勿」のなまったものであることによるものであろうと考えられる。

上述のように、「微」は、「無」の類のものにちがいない。しかし、この「微」が、また、「非」のように用いられている例も、若干見られる。例えば、《詩経》の中には、前述のように、「微」が5字用いられているのであって、その4例は、その〈毛伝〉に、「無也」と説かれているのであるが、次の1例については、その〈毛伝〉に、「非」と解説されている。

(4) 耿耿不寐，如有隱憂。微我有酒，以遨以遊。(邶風・柏舟 26)

〔朱子の《集伝》にも、「微，猶非也」と説かれている。〕

「微」が、上例のように、「非」のように用いられるのは、「微」(miuər) と「非」(piuər) の声母が、ともに双唇音のものであるために、たまたま、混用されたものであろうと考えられる。しかし、声母 m の類の否定詞と、声母 p の類のものとは、この小論において、これまで述べて来たように、一般に、きびしく区別されているのであるから、「微」が、上例のように、時に「非」に通じて用いられることがあっても、それによって、「微」の本質を見あまってはならない。

○蔑(mät)「祭月」部

「蔑」も、《書経》の中には、否定詞としての用例がない。《詩経》の中には、〈大雅・板〉(254) と 〈大雅・桑柔〉(257) に、「蔑資」という用例があり、〈大雅・板〉の〈毛伝〉に、その「蔑」を「無」と解している。《左伝》の中には、否定詞としての例が、10 例見られる

が、《論語》などを始め、先秦の諸子には、これまで調べたところでは、まだ、1例も見えない。してみれば、この「蔑」も、春秋の頃に少し用いらただけで、戦国以後には、通常用語としては、もはや、すたれてしまったものということができる。

この「蔑」も、声母mの類のもので、やはり、「無」の類の否定詞と考えられる。また、「蔑」も、その否定の語気が強いものであったと考えられる。《左伝》における用例10例の中、その9例までが、その文末に「矣」が用いられていることからしても、この「蔑」も、きつい語気のものであったことが考えられる。「矣」は、春秋以後、大きく発達して来た語気詞で、きつい決定・断定の語気を表わすものである(注36)。例えば、

- (1) 丕鄭之如秦也，言於秦伯曰。……臣出晉君。君納重耳。蔑不濟矣。(左伝・僖公10年5—59)

〔杜注〕に、「蔑，無也」とある。]

- (2) 吾父死而益富，死吾父而専於国。有死而已，吾蔑從之矣。(左伝・襄公21年16—42)
〔《国語》の中にも、次のように、同じような言いかたが見られる。その〔章注〕には、やはり「蔑，無也」と解している。

死吾君而殺其孤。吾有死而已，吾蔑從之矣。(晉語二，8—106)]

「蔑」は、上例(2)に見られるように、「有」に対して用いられているものである。また、これらの例のように、重大な発言をする場合に、きつい語気のものとして用い、その文末に「矣」を用いていることが多いものである。それで、この「蔑」は、少し固い文語じみた言いかたのものであったろうと考えられ、春秋の頃になってから、新たに発達して来た日常の口語的なものであったとは考えられない。してみれば、この「蔑」(mät)も、恐らくは、西周以前からの強い語気の「勿」(miuat)から変って来たものであったろうと考えられる。

なお、上例(2)について注記しておいた《国語》の中の「蔑」につき、《経伝釈詞》においては、「猶不也」と解しており、楊樹達氏の《詞詮》も、その説によっている。しかし、上述のように、この「蔑」は、「有」に対して用いられているものなのであることからしても、その〔章注〕を改めることはできない。例(1)については、《詞詮》も、〔杜注〕によって、「無也」と解している。

○末(muat)「祭月」部

「末」は、《書経》・《詩経》においても、また、《左伝》の中にも、否定詞としての用例はない。《論語》に至って、始めて5例見られ、《墨子》の中にも、「魯語」の中の故事を引用したものの中に、1例見られる。《孟子》・《荀子》・《管子》・《孫子》・《老子》・《莊子》・《列子》などの中には、いずれも、その用例がない。しかし、《礼記》の《檀

(注36) 拙論「已」「矣」の来源について——《書経》語法札記4——>《金沢大学教養部論集・人文科学篇8(1970)》を参照。

弓〉に2例、《公羊伝》の中にも4例用いられている。この〈檀弓〉や《公羊伝》の中にも、否定詞としての用例が見られることは、注意すべきことと考えられる。〈檀弓〉は、その用語の上で、《論語》にきわめて近いものであり(注37)、また、《公羊伝》は、齊人の所伝になるものである。してみれば、「末」を否定詞として用いることは、春秋の末頃から、魯や齊において、実際には、かなり用いられるようになっていたものと考えられる。次に、まず、その用例を若干あげよう。

- (1) 果哉，末之難矣。(論語14・39)

〔〈集解〉に、「末，無也」とある。〕

- (2) 雖欲從之，末由也已。(論語9・11)

〔〈皇疏〉に、「末，無也」とある。なお、この文の「末由也已」は、《史記》〈孔子世家〉(47—49)においては、「蔑由也已」になっている。〕

- (3) 昔者吾喪姑姉妹，亦如斯。末吾禁也。(礼記・檀弓・下4—28)

〔〈鄭注〉に、「末，無也」とある。〕

- (4) 吾与鄭人末有成也。(公羊伝・隠公6年)

〔〈何注〉に、「末，無也」とある。〕

- (5) 已葬而責酒於四弟。四弟曰，吾末予子酒矣。(墨子・公孟12—25)

〔墨子が「魯語」の中の故事として述べているものである。〕

- (6) 食下，問所膳。命膳宰曰，末有原(礼記・文王世子8—1)

〔〈鄭注〉に、「末，猶勿也。原，再也。」とある。〕

この「末」も、声母mのもので、やはり、「無」の類の否定詞ということができる。上例について注記しておいたように、古くから、多く「無也」と解かれていることからしても、「無」の類のものであることが、明らかである。また、この「末」は、「無」の類の中においても、「無」よりも、むしろ、「蔑」に近かったものと考えられる。上例(2)について注記しておいたように、《論語》中の「末」が、《史記》においては、「蔑」になっていることは、きわめて注意すべきことと考えられる。

「蔑」は、前述のように、漢代においては、口語としては、すでに用いられなくなっていたと考えられるものである。漢初の頃の儒者の手になるものが多いと考えられる《礼記》の中にも、「蔑」は、1字も用いられていない。それで、《論語》の中の「末」の字が、《史記》において、「蔑」の字に改められているのは、文語的な書きかたにしようとしたことによるものと考えられる。また、「蔑」(mät)は、前述のように、「勿」(miuat)から変って来たものと考えられるのであるが、この「末」(muat)もまた、恐らくは、「勿」から変って来たものであろうと考えられる。しかし、「蔑」は、前にあげたような用例からしても、かなり固い重々しい言いかたのものであったと考えられるのであるが、それに対して、この

(注37) 顧炎武が、その《日知録》において、《論語》には、「斯」は70字で、「此」はなく、「檀弓」にも、「斯」は53字で、「此」は1字だけにすぎない、ということを指摘したことは、有名である。なお、太田辰夫氏の〈檀弓文法略説〉《古典中国語文法》(1964年)を参照。

「末」は、恐らくは、日常の口語的なものであったろうと考えられる。このように、「蔑」と「末」とは、もともと、ともに「勿」〔「隊術」部 (at)〕から、「祭月」部 (at) のものに変って来たものと考えられるのであるが、漢代においては、かなり大きく違って来ていたものということができる。

「末」は、上述のように、もともと、西周以前からの強い語気の否定詞の「勿」が、口語的に変って来たものと考えられる。この「末」は、春秋の末頃から、魯や齊の地で、多く用いられるようになって来ていたものであるが、次第に広く用いられるようになって来ていたものと考えられる。《呂氏春秋》などの中にも、その用例が見られるのであるから(注38)、秦の頃には、すでに、かなり一般化していたものと考えられる。《史記》においては、この「末」を避けて、文語的な「蔑」に改めているのであるが、その当時の口語においては、もちろん、この「末」(muat)が多く用いられるようになっていたものと考えられる。

また、上例(6)について注記しておいたように、この「末」について、《礼記》〈文王世子〉の〈鄭注〉に、「猶勿也」と解している。この〈鄭注〉は、もちろん、その「末」が、禁止を表わしているものであることを説明しようとしているものである。しかし、「勿」は、前述のように、漢代においては、口語としては、すでにすたれて来ていたものと考えられる。それで、この〈鄭注〉は、古典の中にはあまり用いられていない用法の「末」について、文語的な用語によって解説しているわけである。しかし、実際は、その解説されている「末」(muat)のような言いかたが、その「勿」(müuat)に代るものになって来ていたものということができる。

なお、呂叔湘氏は、現代語における否定詞の「没」は、その中古音は、「muat」であり、この「没」は、古代語における「勿」から生じて来たものであると論じている(注39)。現代語における「没」は、正しく、この「勿」から変って来たものと見るべきものであろう。しかし、この「勿」から「没」への発達の過程において、この「末」(muat)のような言いかたも行われていたことに注意しておかなければならない。

最後に、漢以後における否定詞の発達のしかたについて、略説しておくことにする。

先秦における否定詞は、この小論に述べたように、その種類は、かなり多いものであった。しかし、それらの否定詞は、その声母pの類のもの、声母mの類のもの、この二つの類のものが、それぞれ、単一化される方向に発達して来ていた、ということができる。

まず、声母mの類のものについていえば、この類の否定詞は、その種類が、特に多かつ

(注38)《呂氏春秋》〈開春〉に、魏の犀首の言として、「吾末有以言之」とあり、その高誘の注に、「末、猶無也」とある。

(注39)(注23)にあげた呂叔湘氏の論文 p.23 を参照。なお、周法高氏が、中古における「没」は、「勿」の後身であるが、現代語における「mei」は、それとは違うもので、古代語の「微」または「末」の名残りであると論じていることには、賛成ができない。周法高：〈中国語法札記・説否定詞「没」〉《歴史語言研究所集刊・第24本》を参照。

たのであるが、現代語においては、上述のように、「没」一つに単一化されるようになっていく。この「没」は、先秦においては、この類の否定詞の中において、もっとも多く用いられていた「無」から発達して来たものではなく、その強い語気の否定の「勿」から発達して来たものである。つまり、西周以前からの強い語気の否定詞であった「勿」の系統のものが、けっきょく、声母mの類の否定詞の主力を占めるようになり、現代語においては、その後身である「没」に単一化されるようになっているわけである。

声母pの類のものについても、同じようにいうことができる。すなわち、まず、古代語における「不」と「弗」とは、現代法においては、「不」一つに単一化されているのであるが、この現代語における「不」は、実は、古代語における「弗」の発達して来たものなのであって、やはり、声母pの類の否定詞の中、その強い語気の否定詞であったものが、その類の主力を占めるようになって来ているものということができる。この「弗」と「不(否)」との関係について、呂叔湘氏は、前引の論文の中において、丁声樹氏の説を承けて、次のように述べている。

「弗」本為 *pjuət, ……変而為 puət, 復變為今広州之 pet, 北京之 pu, 而文字則以「不」為之; 至於周・秦之「不」 *pjuəg 則變而為 pju, 復變為今広州之 fau, 北京之 fou, 而文字通作「否」。故就文字言, 有似「弗」合於「不」, 而就語言之實際言之, 則漢・魏以後, 「弗」固是「弗」, 「不」亦是「弗」, 易辭以明之, 則「弗」・「不」對立之局面, 終統一於「弗」也。

「不」が、このように、實際上、「弗」に吸収されるようになって来たことは、かなり早く、唐以前から、起って来ていたことであろうと考えられる。「不」と「否」とは、六朝の頃までは、読書音としては、なお、同じように発音されていたものと考えられる。王仁昫の《刊謬補缺切韻》においては、上声「有」韻の中に、「不」と「否」とがあげられており、「不」については「弗」と解し、「否」については「不從」と解し、その解説のしかたは異なっているが、その字音は、全く同音のものとされていた。また、「弗」については、その入声「物」韻の中にあげられており、「不」と解かれていた。しかし、《広韻》においては、「不」は、その上声「有」韻の中に、「否」と同音のものがあげられているほかに、その入声「物」韻の中にも、「弗」と同音のものがあげられており、「与弗同」と解説されている。その「有」韻の中にあげられている「不」についても、「弗也」と解かれているのであるが、これは、やはり、伝統的な読書音であったものにちがいがなく、その「物」韻の中に、「弗」と同音のものとしてあげられている「不」が、その当時における実際の口語音を表わしているものであろうと考えられる。また、「不」が、このように、「弗」と同じように発音されることは、実際には、かなり早くから行われるようになっていたことにちがいがなく、《広韻》においては、もはや、そのような音を無視して、単にその読書音だけをあげておくことができなくなっていたものと考えられる。

古代語における「不」が、上述のように、「弗」に吸収されて、新しい「不」に変わって来たのと同じように、古代語において、応答語・自立語として用いられていた「否」も、この新しい「不」の発達によって、口語の中から駆逐されてしまっているものということができる。現代語においては、応答語としても、「不」・「不是」・「不對」などが、「否」に代るものとして用いられるようになっている。「否」は、陸志韋氏の《北京話単音詞詞彙》(1956年、科学出版社)にも、全く収められないものになっており、「是否」などの成語的なものとして残っているのではあるが、その「是否」も、「是不是」と「不」を用いていうのが、口語としての通常の言いかたになっている。

また、声母Pの類の「非」も、現代語においては、通常、「不是」というようになっている。それで、先秦における声母Pの類の否定詞は、現代語においては、すべて、「弗」から変わって来た「不」によって統一され、単一的になって来ているものということができる。

(1975. 10. 31)